2022.5.28.
国立国語研究所共同研究プロジェクト
「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」
研究発表会

宮古諸島における「韻律領域の拡張」と多良間島のプロソディー

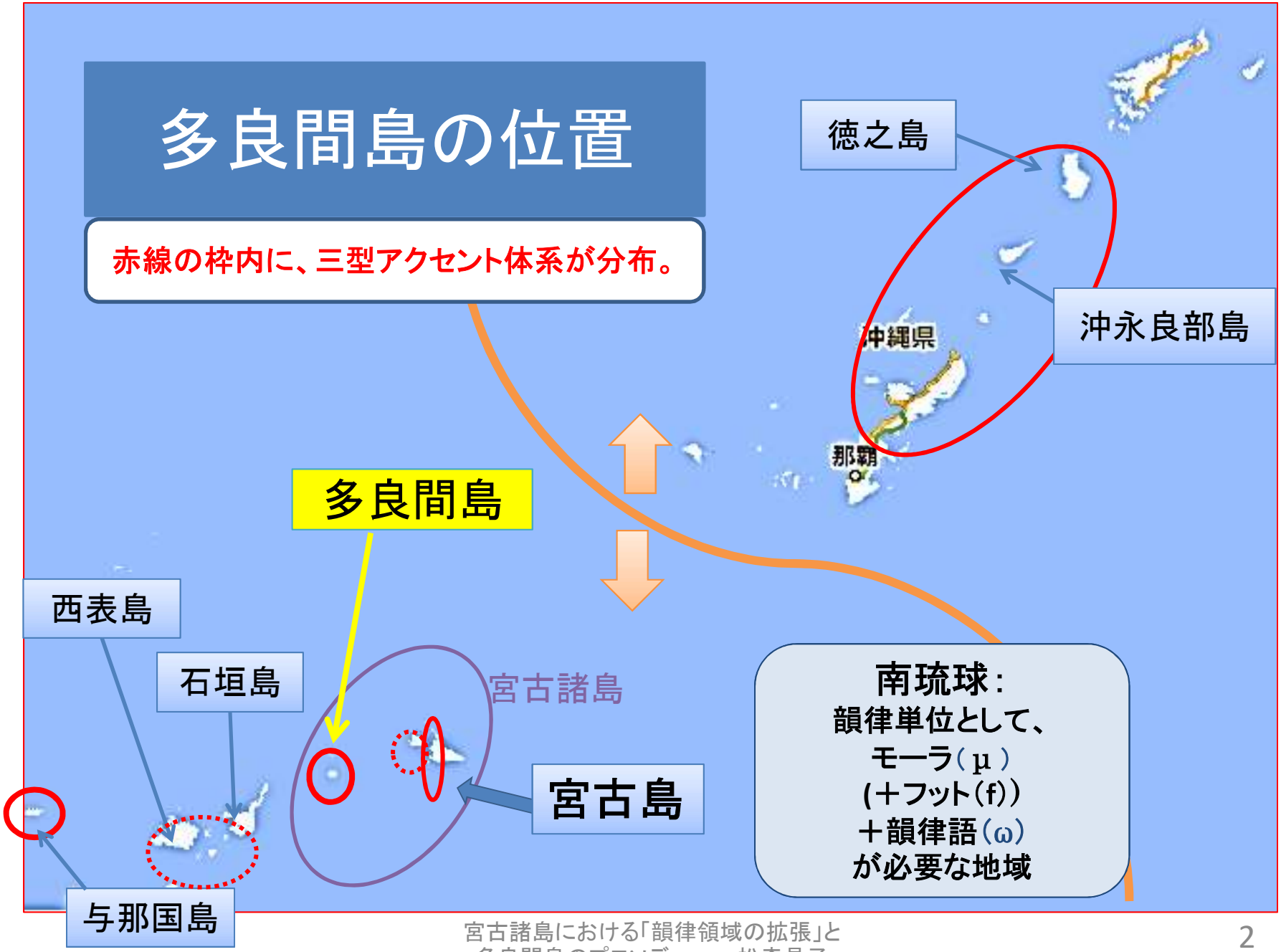
松森 晶子
（日本女子大学）

＊ 本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」および JSPS 科研費 19H00530, 20H01259 の助成を受けている。

＊本発表で提示するデータの一部は、五十嵐陽介氏によって作成された調査票に基づいて収集されたものである。データ使用をご許可くださった五十嵐氏に御礼申し上げます。

多良間島の位置

赤線の枠内に、三型アクセント体系が分布。



南琉球：
韻律単位として、
モーラ（μ）
（＋フット（f））
＋韻律語（ω）
が必要な地域

宮古諸島のアクセント研究史

◇従来の説

宮古諸島のアクセントは1型 or 無型体系が中心。2型体系も「曖昧化」が進みつつある。
（平山・大島・中本 1967、平山（編著）1983:43 等）

◇研究の進展（2012年ごろからの）

- 宮古諸島には明瞭な「3型体系」が観察される。　（多良間島：松森 2001, 2010）

その発見の鍵となったのは、「韻律語」という韻律カテゴリーの想定
池間島：五十嵐ほか（2012），宮古島与那覇（よなは）：松森（2013），
宮古島狩俣（かりまた）：松森（ 2015 ），宮古島上地（うえち）：松森（ 2017 ）等

- 現在それらの「3型体系」の仕組みの解明が進行中　（多良間島・池間島を中心に）
五十嵐(2015, 2016),　青井(2016, 2017, 2018a,b),　セリック（2021），
セリック・青井（2021, 2022），　新田（2018a,b, 2019, 2022）　…

◇アクセント記述の充実：多良間島・水納島

・渡久山春英・セリック・ケナン（2020）『南琉球宮古語多良間方言辞典』
国立国語研究所学術情報リポジトリ
・セリック・ケナン・大浦辰夫（2022）『みんなふつ語彙集』 国立国語研究所言語変異領域

宮古諸島の韻律語(ω)の構成要素

- 名詞　（adan）$_{\omega}$
- 複合語の語根　（adan）$_{\omega}$ +（gii）$_{\omega}$
- 2モーラ以上の助詞　（adan）$_{\omega}$ =（mai）$_{\omega}$
- 名詞＋1モーラ助詞　（adan =nu）$_{\omega}$
- 語根＋1モーラ助詞

（adan）$_{\omega}$ +（gii =nu）$_{\omega}$

- 名詞＋特定の助詞の(最初の)1モーラ

（paru =N）$_{\omega}$（kee）$_{\omega}$

＊例は多良間島のものです。

韻律階層（The Prosodic Hierarchy）

(Selkirk 2009、Ito and Mester 2013　その他)

Intonational Phrase（ι）

Phonological Phrase（φ）　韻律句

Prosodic Word（ω）　韻律語

Foot（f）　フット

Syllable（σ）　音節

Mora（μ）　モーラ

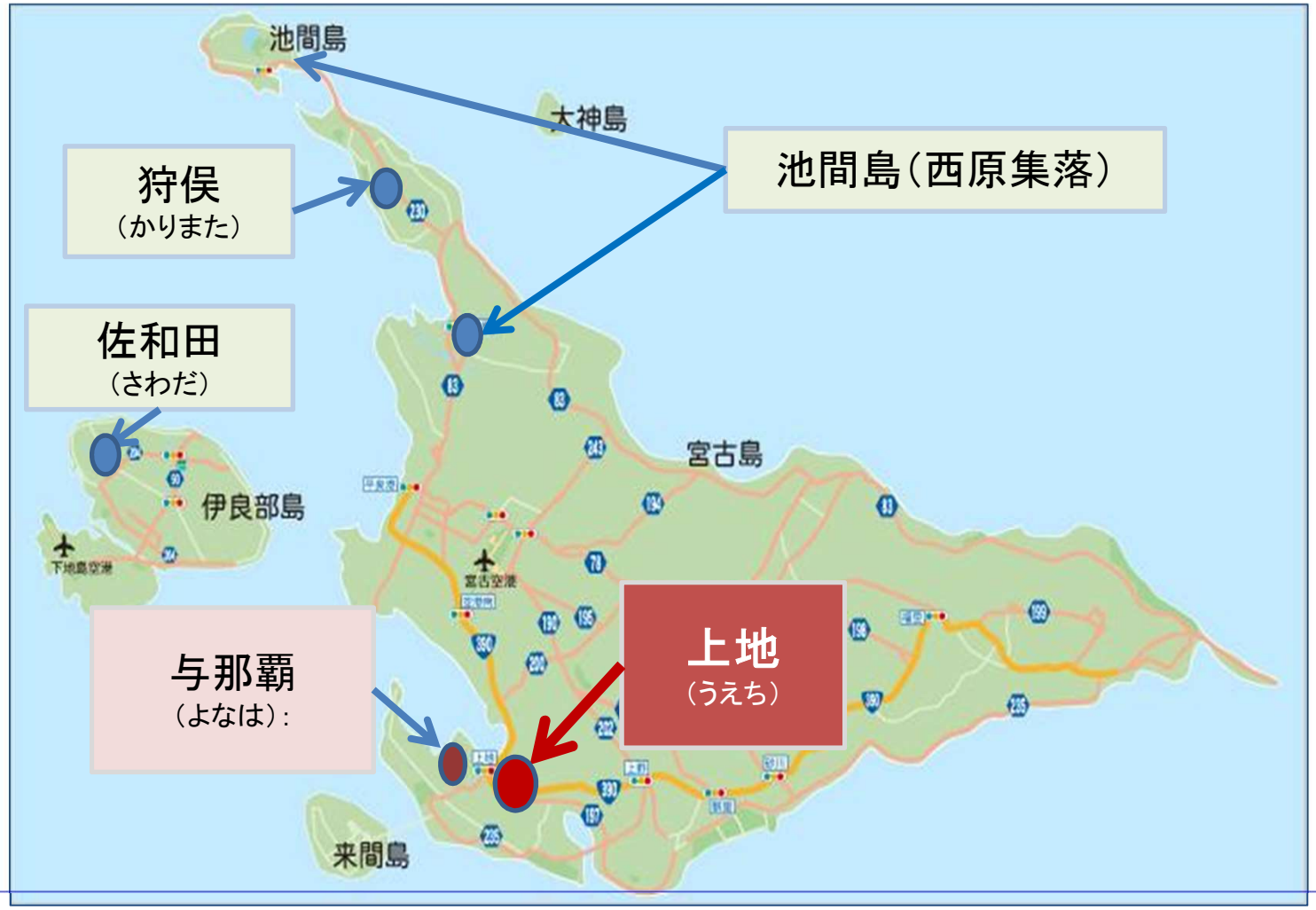
extrinsically-defined categories

再帰的な韻律構造を持つ

intrinsically-defined

in terms of sonority-related phonetic factor and speech rhythm

1. 宮古島の三型体系:
韻律語の再帰的構造



宮古島　上地方言の3型体系

以下本発表のデータでは、高い音調を**青字**で、低い音調を黒字で示す。

A

mizu　**gami**　**N**　**ka**] i [**du** ...　水甕に…

saki　**gami**　**N**　**ka**] i [**du** ...　酒甕に…

B

msu　**ga**] mi N　kai [**du** ...　味噌甕に…

mim　**ga**] mi N　kai [**du** ...　耳甕に…

C

u] pusu　gami N　kai [**du** ...　海水用甕に…

ma] asu　gami N　kai [**du** ...　塩甕に…

Nkai（向格）du（焦点）

上地方言の3型体系の特徴

上地方言の3つの型の区別は,

(a) 韻律句が<u>3つ</u>以上の韻律語から成り、

(b) 各韻律語が<u>3モーラ</u>以上から成る

場合に、もっとも明瞭に出現する。

（1）<u>3モーラ</u>が1単位となるフットを想定する。

$<\underline{\mu}\ \ \mu\ \ \mu>_f$

（2）フットの右端を韻律語の右端と揃えよ。

$(\ \ldots\ldots\ \ \mu\ \ \mu\ \ \mu\ \ )_\omega$

$<\underline{\mu}\ \ \mu\ \ \mu>_f$

上地方言の3型体系

Nkai 向格， du: 焦点標識

	ω1	ω2	ω3	
A	(**mizu**)ω	(**gami N**)ω	(**ka**] i [**du**)ω … **<μ μ μ> f**	水甕に…
B	(**msu**)ω	(**ga**] mi N)ω **<μ μ μ> f**	(kai [**du**)ω …	味噌甕に…
C	(**u**] pusu)ω **<μ μ μ> f**	(gami N)ω	(kai [**du**)ω …	海水用甕に…

上地方言: 3つの韻律語のうちのどれかが 3モーラに満たない場合　Matsumori（2019）

kara 奪格

A	**kuusu**	**pari**	**ka**] ra	[**du**	唐辛子畑から…
	buugɨ	**pari**	**ka**] ra	[**du**	サトウキビ畑から…
B	**sɨmna**]	pari	ka ra	[**du**	ネギ畑から…
	mami]	bari	ka ra	[**du**	豆畑から…
C	**ba**] soo	bari	ka ra	[**du**	バナナ畑から…
	u] kiN	bari	ka ra	[**du**	ウコン畑から…
	ω1	ω2	ω3		

上地方言：韻律語が3モーラに満たない場合

B （ simna ）$_{\omega 1}$ （ pari ）$_{\omega 1}$ （ kara du ）$_{\omega 1}$

μ μ μ　　μ μ　　μ μ μ

2つの韻律語をまとめて、より大きい韻律語を形成する

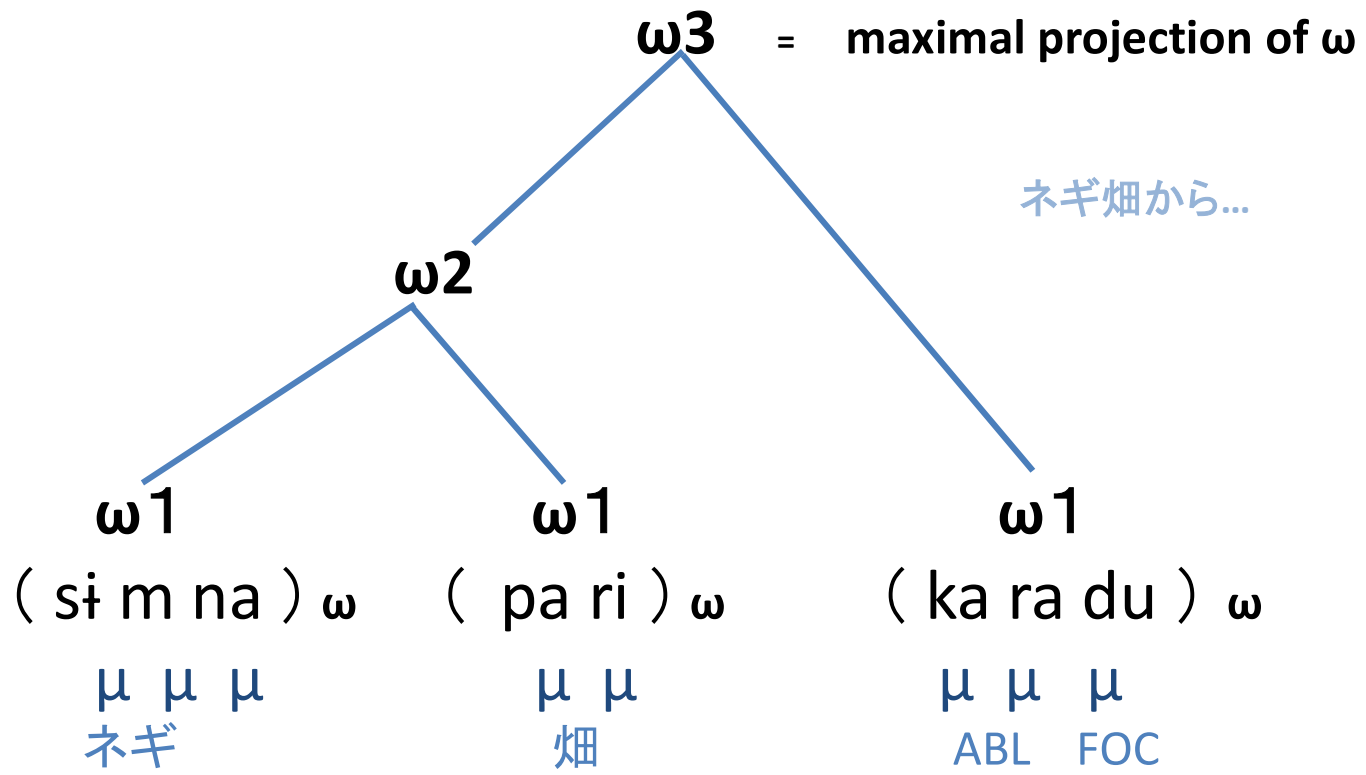
B （ sim na　pari ）$_{\omega 2}$ （ kara du ）$_{\omega 1}$

μ μ <μ μ μ>$_{f}$　　μ μ μ

ネギ畑から…

韻律語（ω）に再帰的な（ recursive な）構造を想定

フット構築は下のレベルから上のレベルに循環的に行われる。（Matsumori 2019）



韻律語の最大投射＝文節： 文節も韻律語の一種である。

2. 多良間方言の三型体系：その仕組み

本発表の主な提案

（1） その 3種の型の音調実現を（完全な形で）観察するには、文節（韻律語（ω）の最大投射）のレベル（だけ）でなく、それより上の韻律カテゴリー ―韻律句（ φ ）― における音調を検討する必要がある。

（2） そこには「韻律領域の拡張」（窪薗 2021: 256）（「アクセント句の拡張」とも）が関与している可能性がある。

「韻律領域の拡張」の例：鹿児島方言

「特殊複合上の法則」（平山　1951：159-164）
（複合語ではないのに）「一般複合語法則（式保存）」にしたがう例

①属格の助詞「ノ」が間にあるとき

カン　フクロ　⇒　カン ノ　フクロ
（紙：A）　（袋：B）　（紙の袋：A）

カス　コ　⇒　カス ノ　コ
（数：B）　（子：A）　（数の子：B）

②形容詞が後続の名詞を修飾するとき

アケ　ダンプ　⇒　アケ　ダンプ
（明るい：A）　（洋燈：B）　（明るい洋燈：A）

ヨカ　イショ　⇒　ヨカ　イショ
（良い：B）　（衣装：A）　（良い衣装：B）

「韻律領域の拡張」 の例：東京方言

東京方言の形容詞のアクセント

本来の2つの型の区別が（語だけでなく）句のレベルに実現し、そこにより明瞭な形で残っている。

<語のレベル>

（区別が見えなくなる）

*か[なしい ＞ か[なし]い

う[れし]い

<句のレベル>

（本来の型の区別が出現する）

か[なしい 話

う[れし]い 話

- 「韻律領域の拡張」によって、 韻律語（語や文節）レベルの特徴が、より大きい「句のレベル」でも実現する。
- その後、語のレベルでその特徴が消滅したとしても、句のレベルにおいてそれが明瞭に残されていることがある。

多良間島プロソディーの記述
（これまでのまとめ）

- 三型体系（A型, B型 ,C型と呼ぶ）
- A型は核（＊）のない型
- B型は2つめ、C型は3つ目の韻律語に＊ のある型
- ＊の位置の計算に用いられる単位は、（モーラに加えて） 韻律語
- （弁別的なのは）低い所（低核）

多良間島の韻律についての（これまでの）一般化 （2010～2017年頃まで）

ピッチの「下がり目」の位置が有意味

（松森 2010, 2014, 五十嵐 2015, 2016, 青井 2016, 2017 等）

- A型は 下がり目 のない音調型で実現。
- B型とC型は 下がり目 のある音調型で実現。
- B型とC型は 下がり目 の位置により区別される。

したがってアクセントは、各韻律語の次末モーラに置かれる。

	A型	B型	C型
a.	**kuba+kii=mai**…	**mami+ki**] i=mai…	**ada**] n+kii=mai…
	クバ+木=も	豆+木=も	アダン+木=も
b.	(ku.ba)(gi.i)(ma.i)	(ma.mi)(gi’.i)(ma.i)	(a.da’.n)(gi.i)(ma.i)
	H	H	H
c.	(ku.ba)(gi.i)(ma.i)	(ma.mi)(gi’.i)(ma.i)	(a.da’.n)(gi.i)(ma.i)
	H	H L	H L

多良間島の韻律について（これまでの）一般化（2018年頃から現在まで）

松森（2016）：韻律句（ φ ）が連なる場合の多良間島の音調実現

{ **kɨnu**] u* mai } φ { upu* [**sju gami ju** } φ { **aree-butaL** } φ

昨日も　　海水用甕を　　洗っていた。

{ **kɨnu**] u* mai } φ { upu* [**sju gami ju** } φ { **katami**] * i - butaL } φ

昨日も　　海水用甕を　　担いでいた。

- **有意味なのは、<u>下がり目の位置（だけ）ではない</u>可能性。**
  =上がり目の位置も重要。

- **「H音調付与」は各文節（韻律句）ではなく、もっと大きいレベルで起こる。**

多良間島の韻律について
これまでの一般化（2018年頃から現在まで）

青井（2018a）： ピッチ上昇は、下降が予測されるより1モーラ右に出現する。

{ **wa**] a* msju mai } φ … 豚味噌も…

{ **zɨma**] mi* msju mai } φ … ピーナツ味噌も…

{ **avva m**] sju* mai } φ … 油味噌も…

{ **wa**] a* msju mai } φ { zɨmami* [**msju mai** } φ …

豚味噌も ピーナツ味噌も…

{ **wa**] a* msju mai } φ { avva msju* [**mai** } φ …

豚味噌も 油味噌も…

新田（2018a,b, 2019）： 「アクセント低核」の提唱

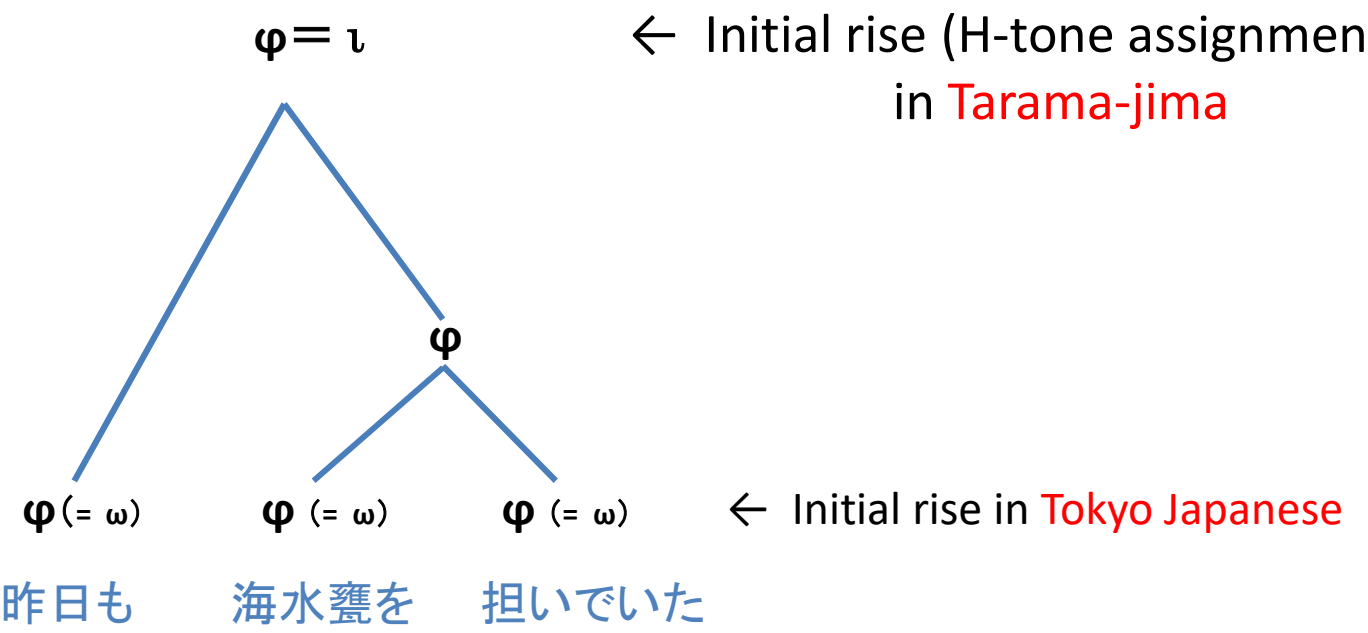
①アクセント核は、韻律語の末尾モーラに置かれる。
②アクセント核には「低」が指定される。

cf. The previous generalizations on Japanese prosody:

- **Major phrase**: a domain of downstep and pitch reset
- **Minor phrase**: a domain of realization of (lexical) accent and initial rise

本発表では、これらの用語を使用せず、
再帰的な（**recursive** な）構造を持つ韻律句（ **φ** ）を
想定する （Selkirk 2009、Ito and Mester 2013）

Recursion-based model proposed by Ito and Mester（2013）



The difference between the two systems (Tarama-jima and Tokyo) is just the matter of levels; they both take place in φ ; the difference between them lies in at which level of φ the initial H-tone assignment takes place.

本発表の前提とする規則

多良間島の音調規則（修正版）

(1) イントネーション句（韻律句 φ の最大投射）を H 音調で開始せよ。
(2) アクセント核には、L音調が指定される。（低核）
(3) 基本音調（BTM）は L*H （つまり低核は、その後かならず
どこかで上昇を伴うことを前提とする。）

・ 前の句が低く終わるとき

…{ zɨmami* [**msju mai** } φ　　… ピーナツ味噌も…

L*　H

・イントネーション句の開始部分にきたとき

{ **zɨma**] mi*　msju　mai } φ …　　#ピーナツ味噌も…

H　　L*　H　　（以下、表面に実現しないH音調を点線で示す。）

問題提起：多良間島の韻律句レベルの音調実現
「修飾構造体」（セリック・青井 2021の用語，五十嵐 2015 の「X nu Y 構造体」）の提起する問題

五十嵐（2015：36）の例

A　**kadi**　**nu**　**u]** tu　mai …　　風の音も…

B　**ami**　**nu**　**u]** tu　mai …　　雨の音も…

C　**funi]**　nu　utu　**[mai** …　　舟の音も…

u] tu mai …　(音：C型)

多良間島の韻律句レベルの音調実現

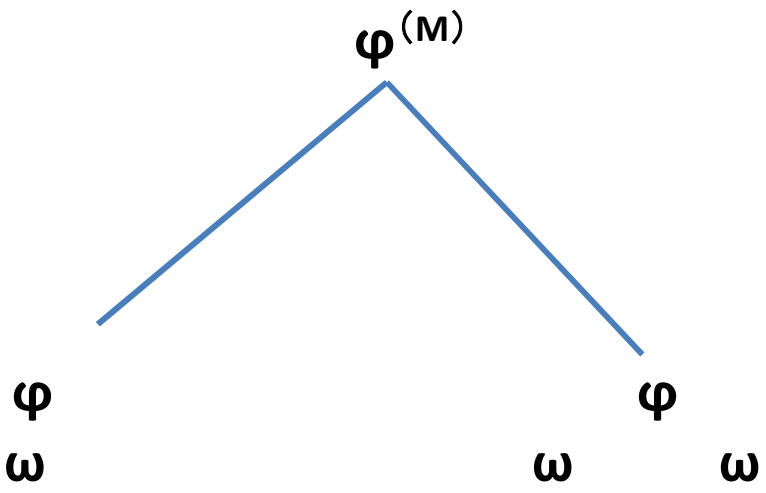
「修飾構造体」の提起する問題

五十嵐（2015：36）の例

A	**usɨ**	**nu**	**ja]** a	mai …	牛の小屋も…
B	**midum**	**nu**	**ja]** a	mai …	女の家も…
C	**nuuma]**	nu	jaa	**[mai** …	馬の小屋も…
A	**pir**	**nu**	**pa]** a	mai …	ニンニクの葉も…
B	**mami**	**nu**	**pa]** a	mai …	豆の葉も…
C	**tamana]**	nu	paa	**[mai** …	キャベツの葉も…

jaa ma] i (家：B型)　　**paa mai** (葉：A型)

「修飾構造体」（青井2018a が「メジャー句」と名付けたもの。本発表では以下、φ(M)と仮称を当てる）の提起する問題



～の音も…

A型　{{ kadi nu } φ　　{ u] tu mai } φ } φ

B型　{{ ami nu } φ　　{ u] tu mai } φ } φ

C型　{{ funi] nu } φ　　{ utu [mai } φ } φ

C型で始まる句の句末の韻律語にH音調が出現

多良間島： 句末のH音調は、B型にも出現する場合がある。 nii 具格 Nkee 向格

A **kuba gii** **nu** **pa]** a nii … くば木の葉で…

B **mami gii]** nu paa **[nii** … 豆木の葉で…

C **ada]** N gii nu paa **[nii** … アダン木の葉で…

A **mizɨ** **gami** **nu** **waabi]** N kee … 水甕の上に…

B **mim** **gami]** nu waabi N **[kee** … 耳甕の上に…

C **upu]** sju gami nu waabi N **[kee** … 海水用甕の上に…

多良間島： 句末のH音調は、A型にも出現することがある
そのH音調の実現単位は（モーラや音節ではなく）
韻律語である　kara 奪格

A **pɨsara pitu nu jaa]** N kee … 平良（の）人の家に…

B **ikema pitu]** nu jaaN **[kee** … 池間（の）人の家に…

C **tara]** ma pitu nu jaaN **[kee** … 多良間（の）人の家に…

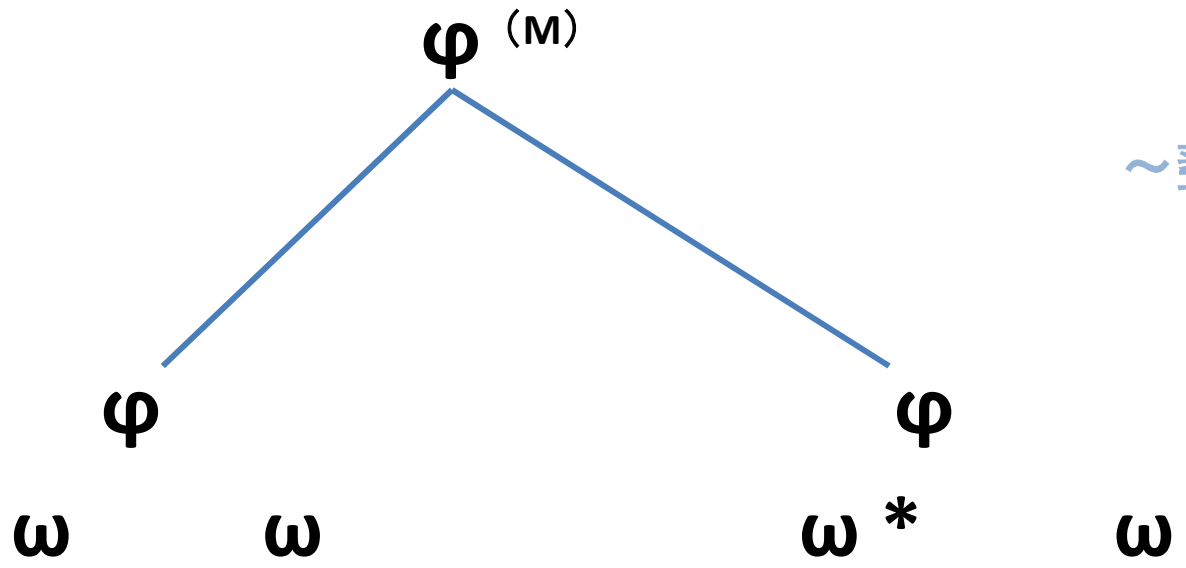
A **jaroo nu paa]** nu sjakɨ **[kara**… テリハボクの葉の先から…

B **mami nu paa]** nu sjakɨ **[kara**… 豆の葉の先から…

C **adaN]** nu paa nu sjakɨ **[kara**… アダンの葉の先から…

青井（2018a）、セリック・青井（2021）説： 「X nu Y」の
Yの音調を削除し、新たに低核（L音調）を付与する。

(X nu) (Y*) : 低核付与規則

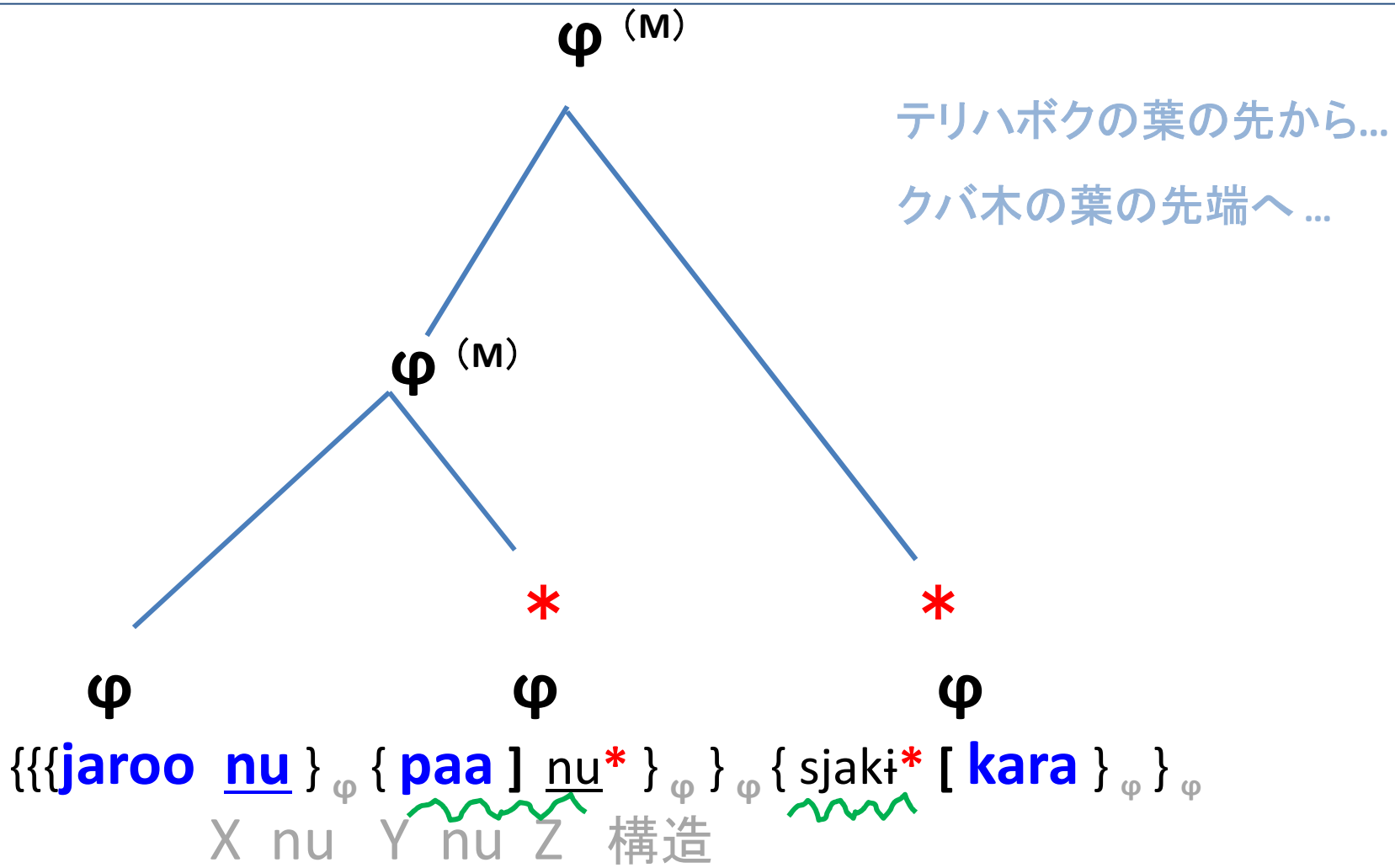


～甕の上も…

{{ **mizɨ** **gami** **nu** } φ { **waa**] bi* mai } φ } φ

{{ **upu**] sju* gami nu } φ { waabi* [**mai** } φ } φ

低核付与規則 (X nu) (Y*) は
再帰的構造に循環的に適用？



多良間島の「修飾構造体」における音調実現
(X nu) (Y*) 説では説明できない例

A　jaroo　nu　　paa] nu *　　sjakɨ * [kara…

テリハボクの葉の先から…

B　mami　nu　　paa] nu *　　sjakɨ * [kara…

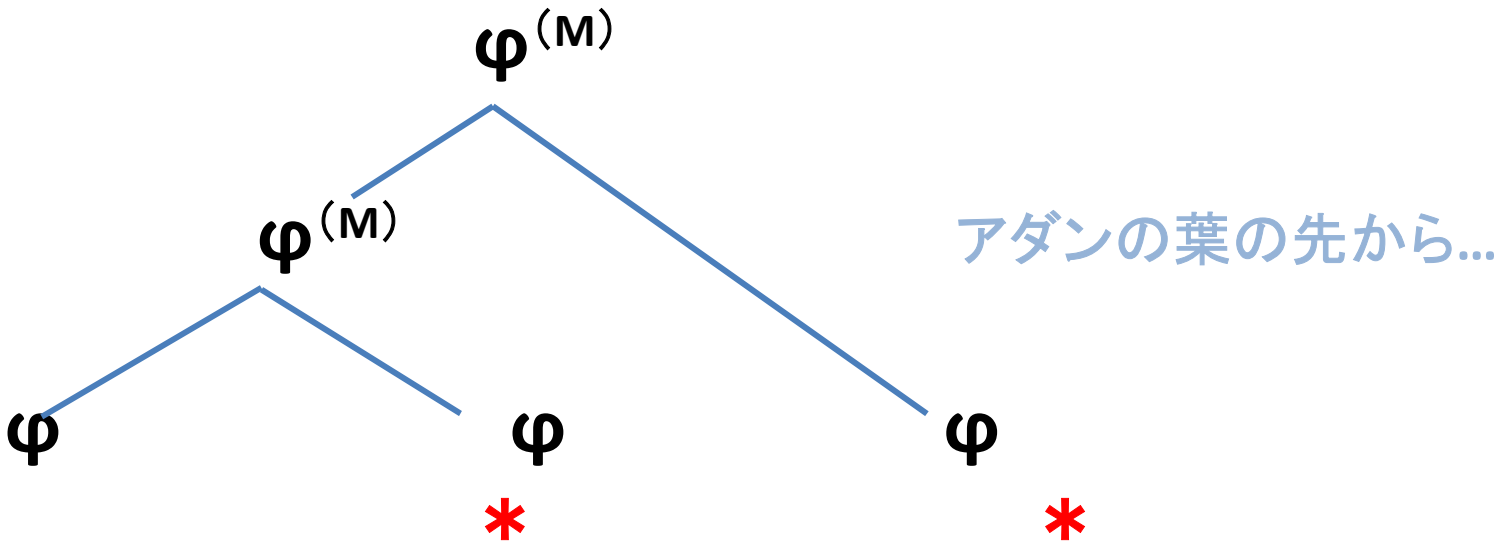
豆の葉の先から…

C　adaN] nu*　　paa* nu　　sjakɨ* [kara…

アダンの葉の先から…

一つ目の Y（**この場合は、**paa * ）に付与された低核（L音調）は実現していない。（**低核の無効化：以降、無効化したアクセントを ＊ で表示する**）

多良間島：付与された低核の無効化が起こる場合



{{{ **adan**] nu * } φ { paa nu *} φ } φ { sjakɨ * [**kara** } φ } φ

(X nu) (Y*)説から予測される音調型 （以下×の記号は、出現する音調型ではないことを示す。）

× {{{ **adan**] nu * } φ { paa [**nu** * } φ } φ { **sja**] kɨ * kara } φ } φ

多良間島　「修飾構造体」における音調実現
五十嵐(2015: 39)から

A **kuba gii nu paa nu** * **pan]** ta * mai …

くば木の葉の先端も…

B **mami gii]** nu * paa nu * panta * [**mai** …

豆木の葉の先端も…

C **ada]** n * gii nu paa nu * panta * [**mai** …

アダン木の葉の先端も…

A,B,C 型のすべての場合に、2つ目の韻律語の低核が無効化

低核付与規則（(X nu) (Y*) 説）から予測される型

× {{{ **kuba gii nu** }$_{\varphi}$ { **paa**] nu * }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ { panta * [**mai** }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ …

× {{{ **mami gii]** nu * }$_{\varphi}$ {paa [**nu** * }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ { **pan]** ta * mai }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$…

× {{{ **ada]** n * gii nu }$_{\varphi}$ { paa [**nu** * }$_{\varphi}$}$_{\varphi}$ { **pan]** ta * mai }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ …

付与された低核の無効化は、どういう条件で、なぜ、
生じるのか。そして、
低核付与規則 (X nu) (Y*) はどの程度一般的なのか。

実際に出てくる型

{{{kuba gii nu }φ { paa nu ＊ }φ }φ { pan] ta ＊ mai }φ }φ

{{{ mami gii] nu ＊ }φ { paa nu ＊ }φ }φ { panta ＊ [mai }φ }φ

{{{ ada] n ＊ gii nu }φ { paa nu ＊ }φ }φ { panta ＊ [mai }φ }φ

もし (X nu) (Y*) だとすると、

（ア） なぜある特定の箇所の低核を無効化するのか。その理由は？
（イ） そもそもなぜ(何のために)、「修飾構造体（X nu Y）」 の場合にYに低核があらたに生じるのか。
（ウ） このアクセント付与の現象は、宮古諸島の諸体系（あるいは日琉語の他の体系や他の言語）に、どれだけ一般的なものなのか。

宮古島上地方言の音調実現の仕方：

韻律語の最大投射（文節）にも、修飾構造体にも
まったく同じ音調型が見られる。

韻律語の最大投射の文節

A (**mizł**)ω (**gami**)ω (**ka**] ra [**du**)ω * … 水甕から…

B (**mtsu**])ω (gami)ω * (kara [**du**)ω … 味噌甕から…

C (**u**] pusu)ω * (gami)ω (kara [**du**)ω … 海水甕から…

{ (**ω** **ω**) **ω** }φ

修飾構造体

A (**mizł**)ω (**gami** <u>**nu**</u>)ω (**naka**] nu [**du**)ω * … 水甕の中が…

B (**mtsu**)ω (**ga**] mi <u>nu</u>)ω * (naka nu [**du**)ω … 味噌甕の中が…

C (**u**] pusu)ω * (gami <u>nu</u>)ω (naka nu [**du**)ω … 海水甕の中が…

{ { **ω** **ω** }φ { **ω** **ω** }φ }φ(M)

多良間方言の場合： 句末のH音調の出現条件

・修飾構造体ではない文節（韻律語 ω の最大投射の φ ）だと： そこには、
文節末のH音調が実現しない。 { X + Y + (Z) mai }$_{\varphi}$

①	A	**mizɨ**	**gami**	**mai**			水甕も…
	B	**mim**	**ga]** mi *	mai			耳甕も…
	C	**upu]** sju *	gami	mai			海水用甕も…
②	A	**aka**	**mami**	**baru**	**kara** …		小豆畑から…
	B	**oo**	**ma]** mi *	baru	kara …		緑豆畑から…
	C	**tara]** ma *	mami	baru	kara …		多良間豆畑から…
③	A	**guma**	**guru**	**jama**	**mai** …		胡麻殻山も…
	B	**mugɨ**	**gu]** ru *	jama	mai …		麦殻山も…
	C	**jusɨ]** kɨ *	guru	jama	mai …		ススキ殻山も…

多良間島の場合： 句末のH音調の出現条件

・修飾構造体（X nu Y 構造）だと… 句末の韻律語が高くなる。

④ A **kadi** **nu** **u]** tu mai … 風の音も…

B **ami** **nu** **u]** tu * mai … 雨の音も…

C **funi]** nu utu **[mai** … 舟の音も…

⑤ A **kacjuu msju** **nu** **ka]** da mai … 鰹味噌の匂いも…

B **avva msju]** nu* kada **[mai** … 油味噌の匂いも…

C **wa]** a* msju nu kada **[mai** … 豚味噌の匂いも…

⑥ A **pisara pitu** **nu** **fu]**ni mai … 平良（の）人の舟も…

B **ikema pitu]** nu* funi **[mai** … 池間（の）人の舟も…

C **tara]** ma* pitu nu funi **[mai** … 多良間（の）人の舟も…

$$\{\{\mathbf{X}\ \ \mathbf{nu}\}_{\varphi}\{\mathbf{Y}\ [\ \mathbf{mai}\}_{\varphi}\}_{\varphi\ (\mathbf{M})}$$

多良間島 「修飾構造体」における音調実現

⑦ A **kuba gii nu ju]** da* mai … くば木の枝も…
B **mami gii]** nu* juda **[mai** … 豆木の枝も…
C **ju]** na* gii nu juda **[mai** … ゆうな木の枝も…

⑧ A **jaroo nu paa]** nu sjakɨ **[kara**… テリハボクの葉の先から…
B **mami nu paa]** nu * sjakɨ **[kara**… 豆の葉の先から…
C **adan]** nu * paa nu sjakɨ **[kara**… アダンの葉の先から…

$\{\{\{\ \mathbf{X}\ \ \mathbf{nu}\ \}_{\varphi}\ \{\ \mathbf{Y}\ \ \mathbf{nu}\ \}_{\varphi}\ \}_{\varphi\,(\mathrm{M})}\ \{\ \mathbf{Z}\ [\ \mathbf{kara}\ \}_{\varphi}\ \}_{\varphi\,(\mathrm{M})}$

・nu がいくつ連なっても、句末の韻律語だけが高くなる。

3. 本発表の提案（その1）：

修飾構造体の句末に出現するH音調について

多良間島の音調規則（修正版）

（1） イントネーション句（韻律句 φ の最大投射）を H 音調で開始せよ。

（2） 基本音調（BTM) を L*H とする （宮古諸島に共通？）

（3） アクセント核（＊）を、その基本音調 L*H の L* の部分と結びつけよ。

（4） 多良間島の場合： その基本音調 L*H の H音調の部分は
ω の最大投射（＝文節）ではなく、その上の $\varphi^{(M)}$ のレベルで実現する。

つまり：「豚味噌も」や「アダン木から」などでは出現しないが、
「舟の音も」や「アダンの葉の先から」などでは出現する。

C型 {{ funi] nu* }$_{\varphi}$ {utu [mai … }$_{\varphi}$ }$_{\varphi(M)}$ 舟の音も…

L* H

多良間島 「修飾構造体」における音調実現

A **kuba** **gii** **nu** **ju**] da mai ... くば木の枝も…

B **mami** **gii**] nu* juda [**mai** ... 豆木の枝も…

L* H

C **ju**] na* gii nu juda [**mai** ... ゆうな木の枝も…

L* H

本発表で提示する仮説:

この mai の部分に出現する H音調は、 あらたに nu の直後の韻律語（この場合は juda（枝）のところ）に 低核（あるいは低音調）があらたに発生した結果出現したのではなく、

B型名詞、C型名詞の韻律特徴（の一部）が、修飾構造体（ $\varphi^{(M)}$ ）の レベルで出現している、 と考える。

L*H の H音調の出現条件（多良間島）

B, C 型の最後の韻律語にH音調が実現しない場合がある。

五十嵐（2015：38）の例

A **mizɨ gami nu uin** … 水甕の上に…

B **mim ga**] mi nu uin … 耳甕の上に…

H音調が出現していない

C **u**] pusju gami nu uin … 海水用甕の上に…

H音調が出現していない

多良間島： 句末のH音調の出現条件

A **mizɨ** **gami** **nu** **waa]** bi mai … 水甕の上も…

B **mim** **gami]** nu waabi **[** **mai** … 耳甕の上も…

C **upu]** sju gami nu waabi **[** **mai** … 海水用甕の上も…

{ **u**] pusju } φ { gami nu } φ { waabi **[** **mai** } φ …

ω ω

この部分が枝分かれしている（φの内部に2つの韻律語がある）ことが句末のH音調の出現条件

さらに詳しく: 「修飾構造体」における
L*H の H音調の出現条件（多良間島）

五十嵐（2015：36）の例

A　**kadi**　**nu**　**u**] tu　mai …　風の音も…

B　**ami**　**nu**　**u**] tu　mai …　雨の音も…

H音調が出現していない

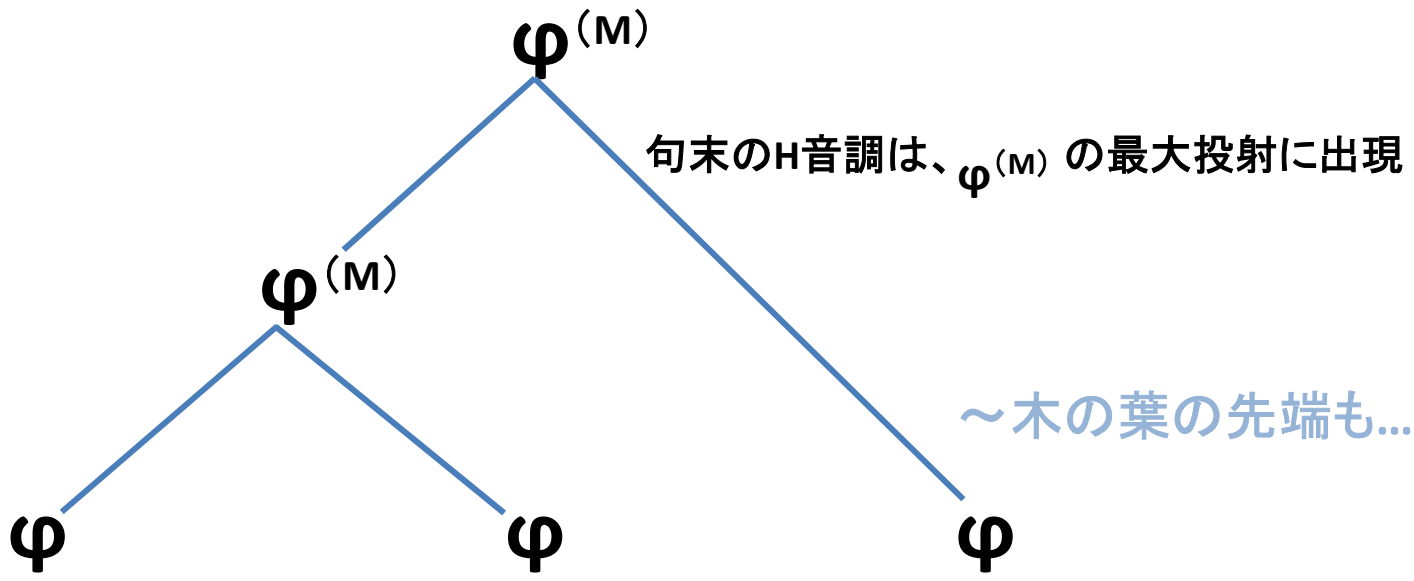
C　**funi**] nu　utu　[**mai** …　舟の音も…

同じ韻律句内の直前の韻律語にH音調がすでに存在する場合には、句末のH音調は出現しない。

{ **ami nu** }$_{\varphi}$　{ **u**] tu　mai }$_{\varphi}$ …

ω　ω

多良間島の 「修飾構造体」における音調実現：韻律語（φ）に再帰的（recursive）な構造を想定する

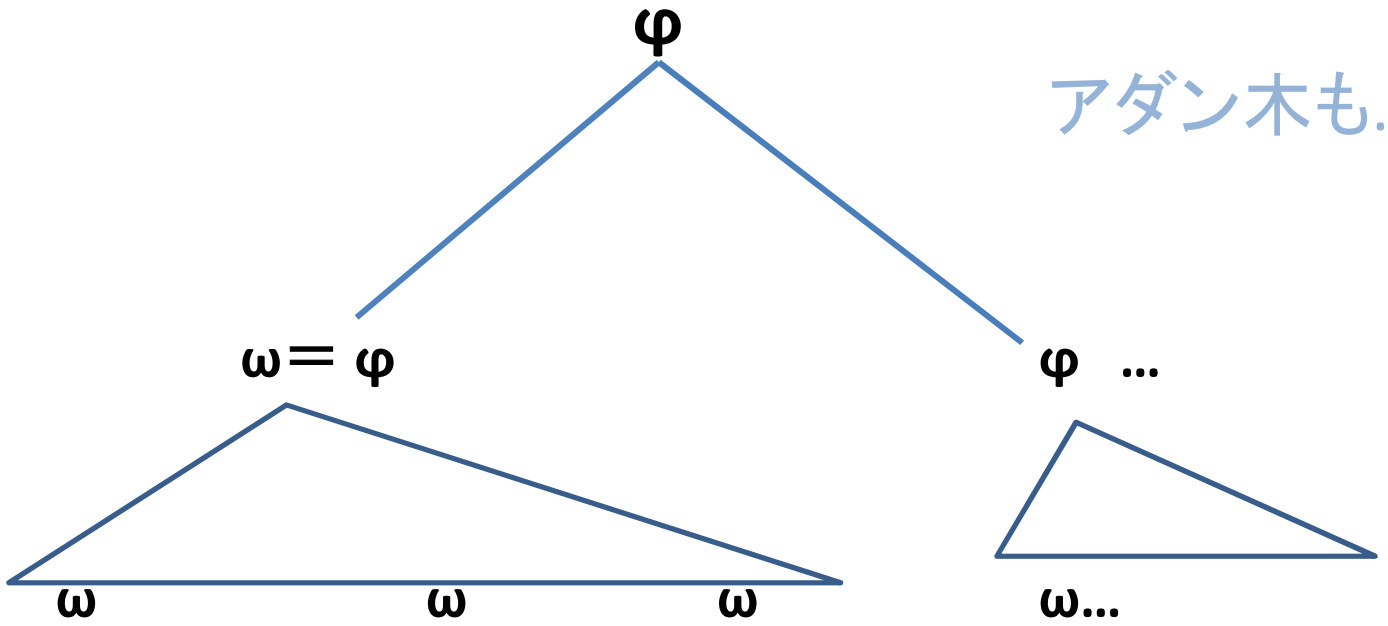


{{{ **kuba gii** <u>**nu**</u> }$_{\varphi}$ { **paa** <u>**nu**</u> }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ { **pan**] ta mai }$_{\varphi}$ * }$_{\varphi}$

{{{ **mami gii**] <u>nu</u> * }$_{\varphi}$ { paa <u>nu</u> }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ { panta [**mai** }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$

{{{ **ju**] na * gii <u>nu</u> }$_{\varphi}$ { paa <u>nu</u> }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ { panta [**mai** }$_{\varphi}$}$_{\varphi}$

多良間方言の特徴：低核と結びついた H 音調は、
ω の最大投射の文節では、
その最後の韻律語に出現しない。

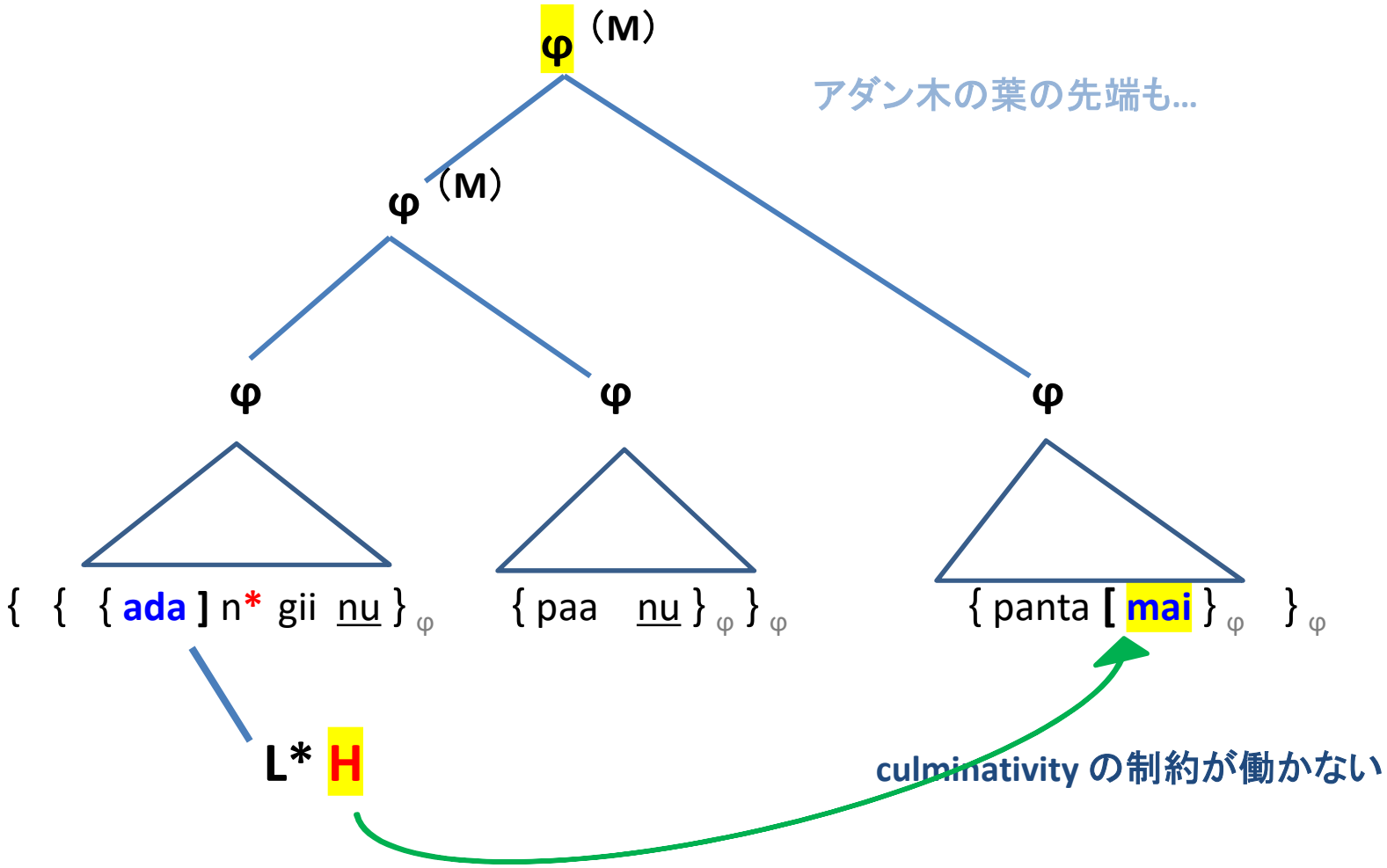


（ ada] n * ）ω （ gii ）ω （ mai ）ω

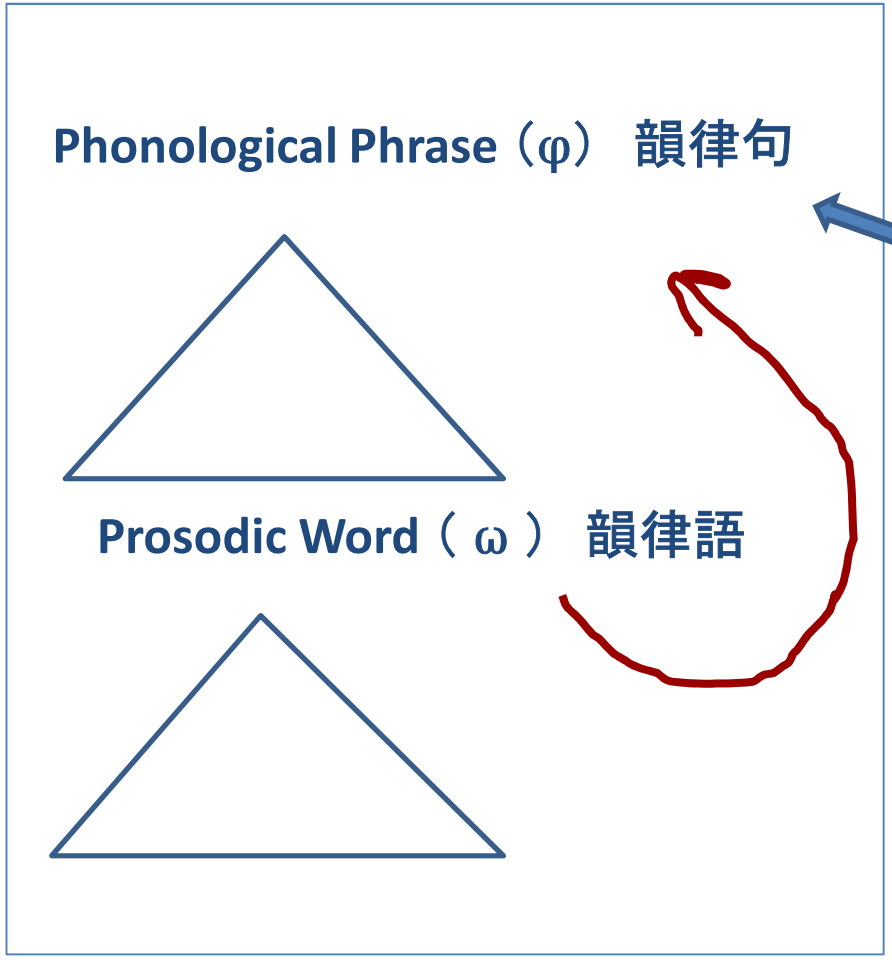
L* H （このH音調は実現しない）

culminativity の制約：ひとつの文節内に2つのH音調は出現しない。

多良間島：低核と結びついた H 音調は、φ（M）の最大投射のφでは出現する（その最後の韻律語に）



Prosodic Hierarchy　に基づく仮説



本発表の仮説

多良間島の　L*H　の
H音調は、原則的にこの φ
のレベルではじめて実現する。

「韻律領域の拡張」が生じたため

松森（通時的）仮説：

① もともと　ω　の最大投射
（＝文節）レベルでもそのH音調
が出現していたのではないか。

② しかし現代では、それが出現
しなくなった？
（culminativityの制約のため）

宮古島上地方言の韻律領域の拡張

① 韻律語（ω）の最大投射（文節）のレベル

A (kuusu)ω (bari)ω (ma] i [du)ω* … 唐辛子畑も…

B (sɨmna])ω (pari)ω * (mai [du)ω … ねぎ畑も…

C (ba] soo)ω * (bari)ω (mai [du)ω … バナナ畑も…

{ （ω ω ） ω }φ

② 韻律句（ φ (M) 修飾構造体）のレベル

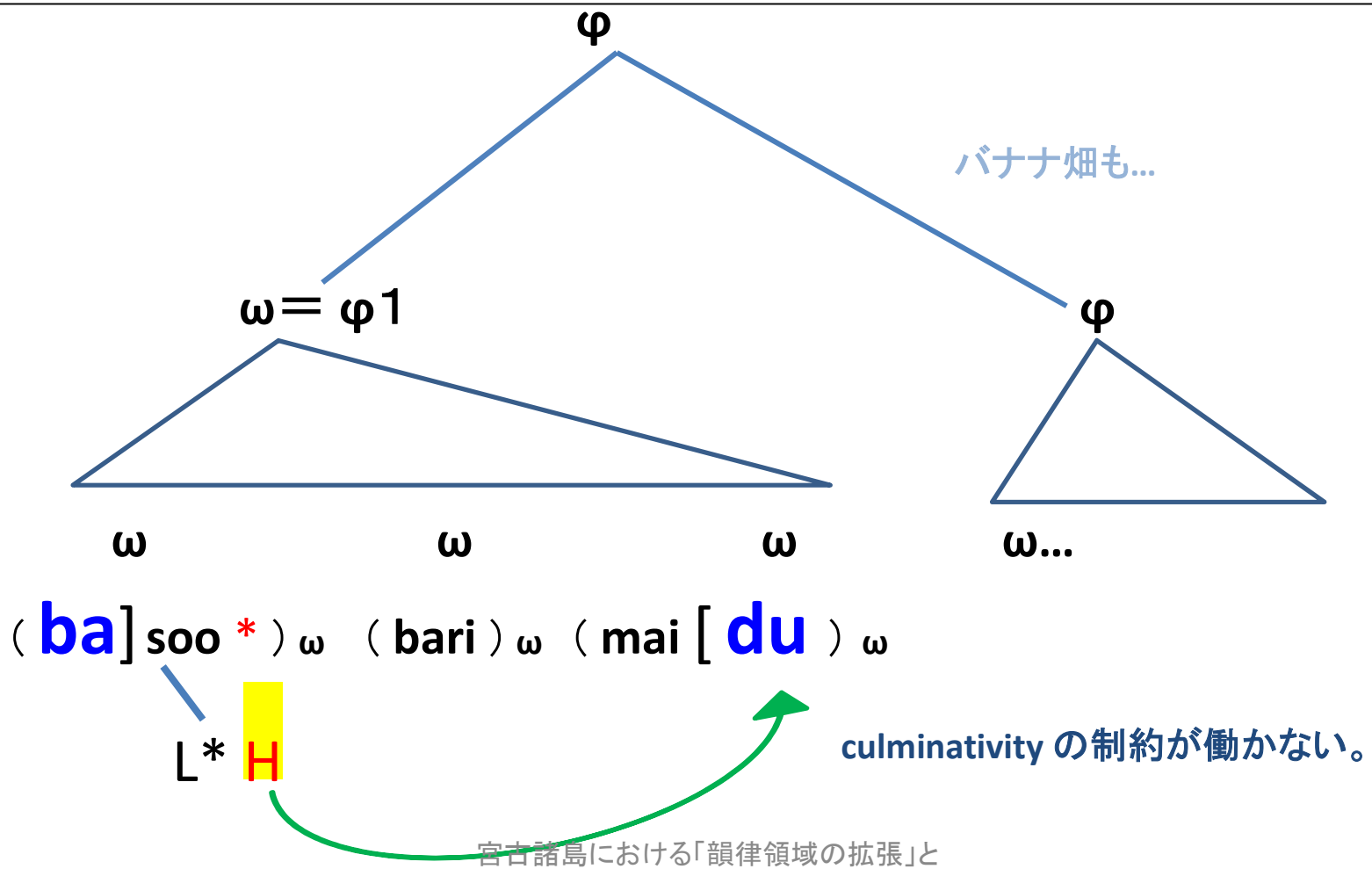
A (kuusu)ω (bari nu)ω (naka] n [du)ω * … 唐辛子畑の中で…

B (sɨmna)ω (ba]ri nu)ω* (naka n [du)ω … ねぎ畑の中で…

C (ba]soo)ω* (bari nu)ω (naka n [du)ω … バナナ畑の中で…

{{ ω ω }φ { ω ω }φ }φ (M)

上地方言：アクセントと結びついた H音調は、ω のレベルで（も）
出現する （ωの最大投射（φ1）の最後の韻律語に）
多良間島でも過去には、ω のレベルでそのH音調が実現していたのではないか。



提案：宮古諸島の音調実現の多様性を捉えて記述するためのパラメータのひとつとして

基本音調：　L* H

その H音調の実現するレベルと単位が、体系によって異なる。

多良間島：　$\varphi^{(M)}$　（青井2018が「メジャー句」と名付けたもの）即ち
修飾構造体レベルの最後の**韻律語**に実現

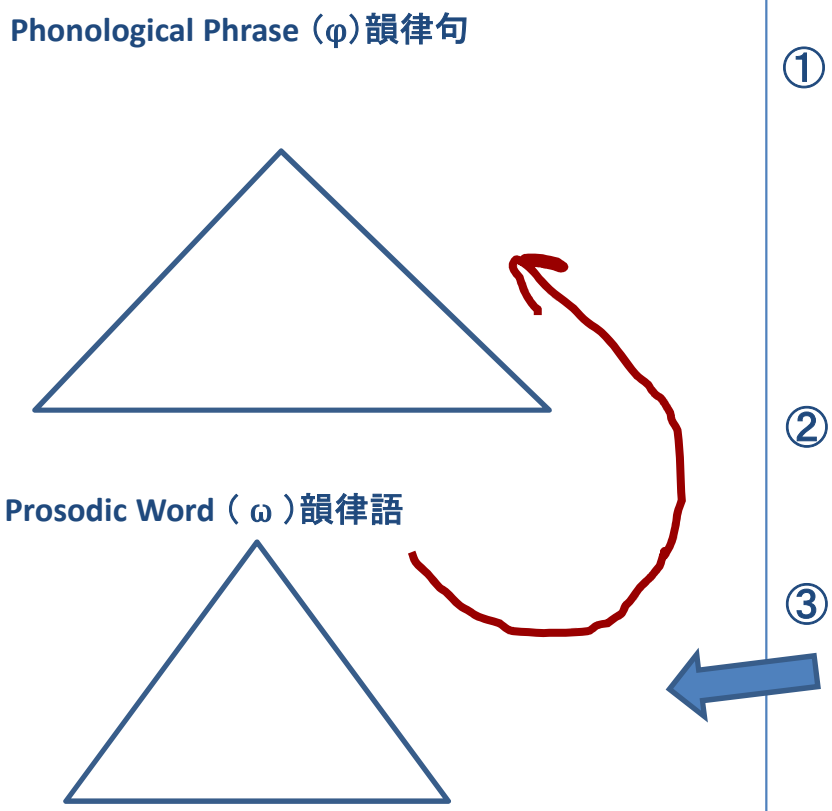
宮古島上地：　φ（ωの最大投射の φ も、修飾構造体$\varphi^{(M)}$も）の最後の**音節**（拍？）
に実現

宮古島池間：　核（L*）の置かれた韻律語の**直後（右隣り）の韻律語**に実現
（「上げ核」説：新田 2022）
（修飾構造体については今のところデータなし）

このようにして宮古諸島の音調実現の多様性を捉えることを試みる。

松森の（現時点での）仮説：L* Hは、かつての「昇り核」の痕跡？

仮説：宮古諸島の「韻律領域の拡張」



本発表で提示した仮説

① 宮古諸島では、
基本音調である L*H の H音調
は（一般的に） ω のレベルでも
φ（M）のレベルでも実現する。
（ただし多良間島では
φ（M）のレベルにおいて出現。）

② そこには「韻律領域の拡張」が関与している。

③ （松森：通時的仮説）
かつては多良間島においても、
ω の最大投射の文節レベルでも
そのH音調が出現していたのではないか。

4. 本発表の提案（その2）：

多良間島のA型における低核の出現について

本発表の主な提案

（1） A型にも低核（アクセント）がある（つまりA型は無核ではない）。
しかし語や文節レベルではそれは見えない（観察できない）。

（2） その核は、韻律語（ω）の最大投射（文節）のレベルではなく、
それより上の韻律カテゴリー　―韻律句（ φ ）―　のレベル
において、はじめて観察できる。

（2） そこにも「韻律領域の拡張」（窪薗 2021: 256） が関与
している。

問題提起：多良間島の「修飾構造体」の提起する問題：
A型の低い音調はなぜ生じるのか？

① 「修飾構造体」 五十嵐（2015）の例

A **kadi** **nu** **u]** tu mai … 風の音も…

B **ami** **nu** **u]** tu * mai … 雨の音も…

C **funi** **]** nu * utu **[** **mai** … 舟の音も…

② 「修飾構造体」 五十嵐（2015）の例

A **kuba** **gii** **nu** **paa** **nu** **pan]**ta mai … くば木の葉の先端も…

B **mami** **gii** **]** nu * paa nu panta **[** **mai** … 豆木の葉の先端も…

C **ada]**n * gii nu paa nu panta **[** **mai** … アダン木の葉の先端も…

宮古島の上地・与那覇・狩俣方言のプロソディー規則

核は、それぞれ3つ目（A),2つ目（B)、1つ目（C)の韻律語に現れる。

（各文節（韻律語の最大投射）の最初の韻律語が決める。）

<A型> ３つめ	{	ω	ω	ω	}φ
<B型> ２つめ	{	ω	ω	ω	}φ
<C型> １つめ	{	ω	ω	ω	}φ

上地方言の音調実現の仕方：

韻律語の最大投射（文節）にも、修飾構造体にも
A型は3つめの韻律語に核。

ひとつの文節内では

A (**mizł**)ω (**gami**)ω (**ka**] ra [**du**)ω * … 水甕から…

B (**mtsu**])ω (gami)ω * (kara [**du**)ω … 味噌甕から…

C (**u**] pusu)ω * (gami)ω (kara [**du**)ω … 海水甕から…

{ (**ω** **ω**) **ω** }φ

修飾構造体では

A (**mizł**)ω (**gami nu**)ω (**naka**] nu [**du**)ω * … 水甕の中が…

B (**mtsu**)ω (**ga**] mi nu)ω * (naka nu [**du**)ω … 味噌甕の中が…

C (**u**] pusu)ω * (gami nu)ω (naka nu [**du**)ω … 海水甕の中が…

{{ **ω** **ω** }φ { **ω** **ω** }φ(M)

与那覇方言の音調実現の仕方：

韻律語の最大投射（文節）にも、修飾構造体にも A型は3つめの韻律語にプロミネンス

ひとつの文節内では

A (mizɨ)ω (gami)ω ([**kara du**])ω* … 水甕から…

B (m [**tsu**)ω (**gami**])ω* (kara du)ω … 味噌甕から…

C ([**maasu**])ω* (gami)ω (kara du)ω … 塩甕から…

{ (**ω** **ω**) **ω** }φ

修飾構造体では

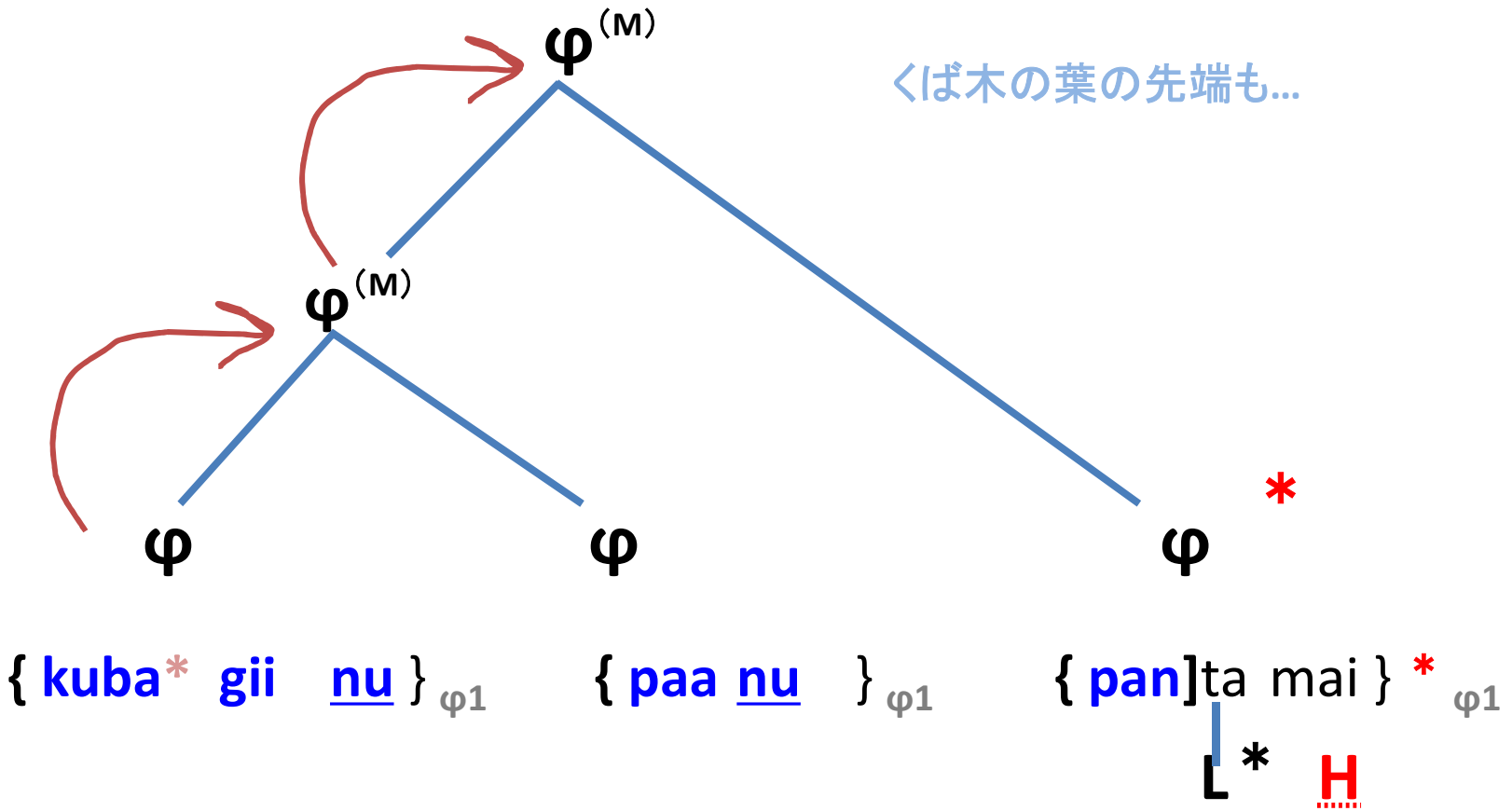
A (mizɨ)ω (gami <u>nu</u>)ω ([**naka N**])ω* (kee du)ω … 水甕の中に…

B (mtsu)ω ([**ga mi <u>nu</u>**])ω* (naka N)ω (kee du)ω … 味噌甕の中に…

C ([**maasu**])ω* (gami <u>nu</u>)ω (naka N)ω (kee du)ω … 塩甕の中に…

{{ **ω** **ω** }φ { **ω** **ω** } }φ(M)

本発表の提示する仮説：多良間島のA型のアクセントは、φ(M) 内部の左から数えて3つ目の韻律句（φ）に出現する？
低核は、そのφの主韻律語（新田2019）に実現する。



多良間島の「修飾構造体」における音調実現
五十嵐(2015: 39)の例について

A **kuba gii nu** **paa nu** **pan]**ta * mai ...

くば木の葉の先端も…

L* H

B **mami gii]** nu * paa nu panta [**mai** ...

豆木の葉の先端も…

L* H

C **ada]** n * gii nu paa nu panta [**mai** ...

アダン木の葉の先端も…

L* H

調査結果：多良間島の「修飾構造体」の音調
A型に限って、2種類の音調型が出現することがある。

A
- **kuba gii nu paa nu panta]** N kee … くば木の葉の先端に…
- **kuba gii nu paa]** nu panta N **[kee** …

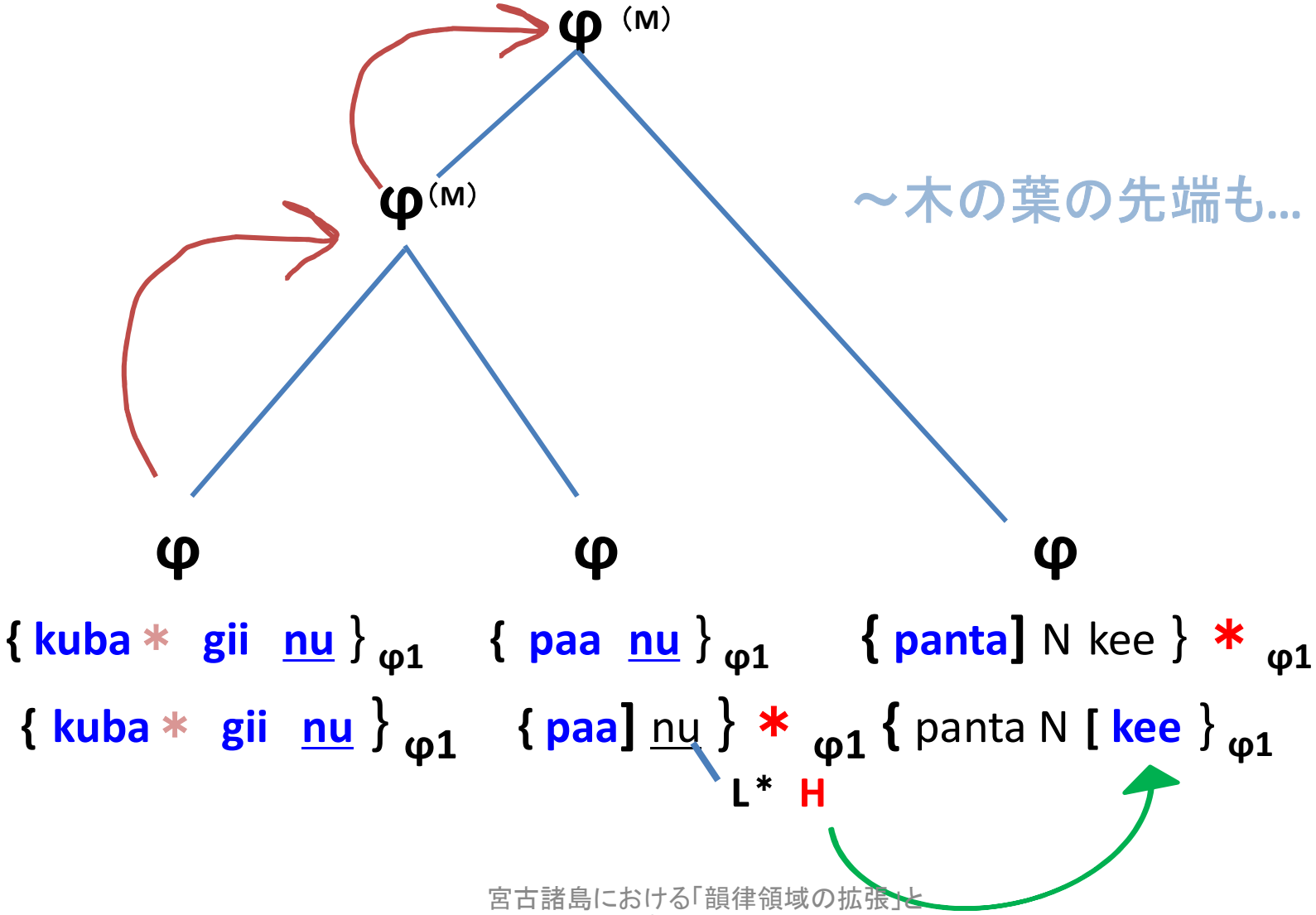
- **jaroo gii nu paa nu panta]** N kee … てりはぼく木の葉の先端に…
- **jaroo gii nu paa]** nu panta N **[kee** …

- **sjanin gii nu paa nu panta]** N kee … 月桃木の葉の先端に…
- **sjanin gii nu paa]** nu panta N **[kee** …

B
- **mami gii]** nu paa nu panta N **[kee** … 豆木の葉の先端に…
- **mm gii]** nu paa nu panta N **[kee** … 芋木の葉の先端に…

C
- **ju]** na gii nu paa nu panta N **[kee** … ゆうな木の葉の先端に…
- **funu]** u gii nu paa nu panta N **[kee** … ミカン木の葉の先端に…

多良間島：A型の語から始まる2つの音調型



多良間島の
「修飾構造体」における音調実現

A **jaama nu kuba nu kii**] nu paa [**mai** … 八重山のくばの木の葉も…

agan nu kuba nu kii] nu paa [**mai** … 東のくばの木の葉も…

agan nu kuba] nu kii nu paa [**mai** …

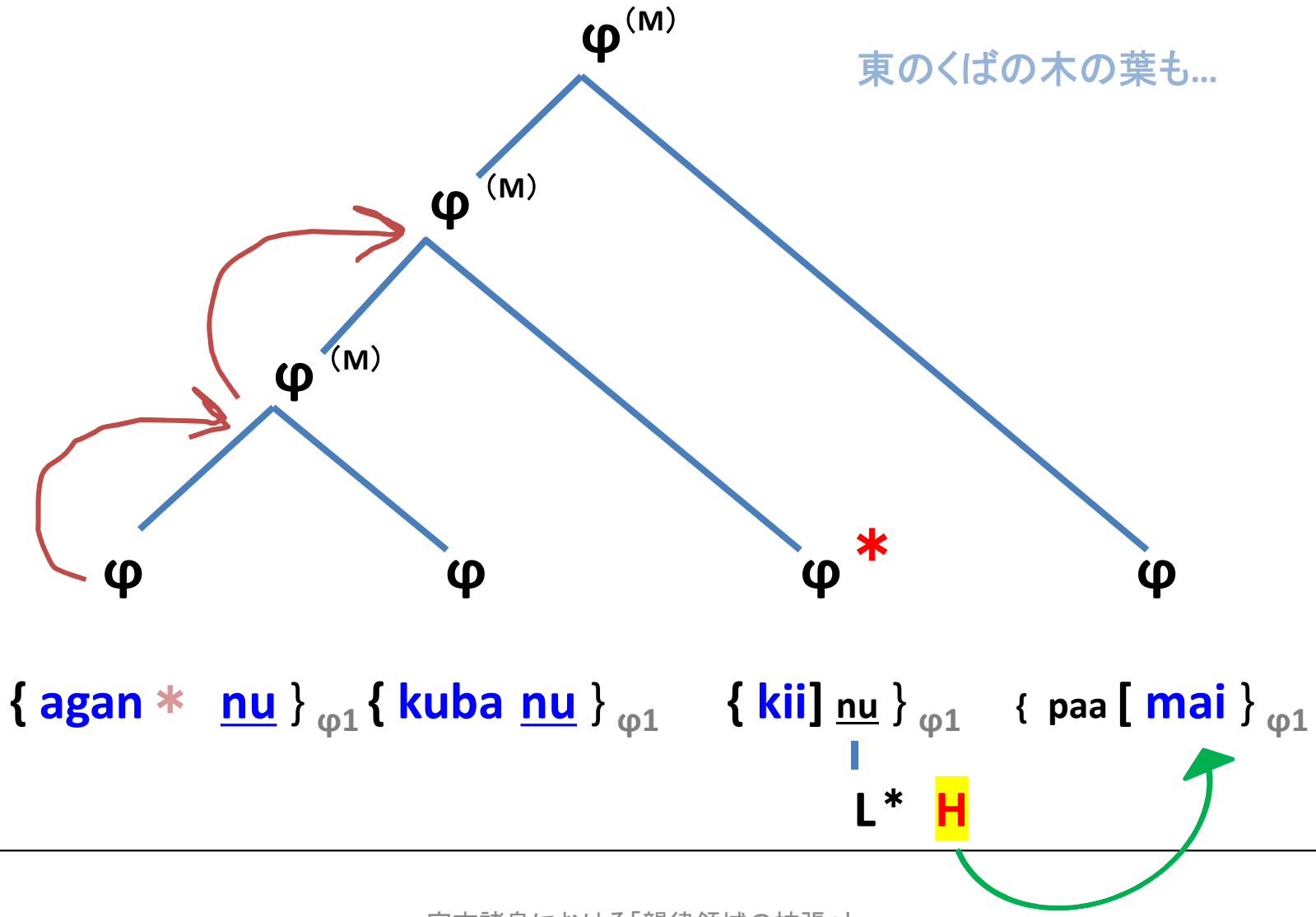
B **sɨma nu kuba nu kii**] nu paa [**mai** … 島のくばの木の葉も…

jama nu kuba nu kii] nu paa [**mai** … 山のくばの木の葉も…

C **minaka**] nu kuba nu kii nu [**pa**]a mai… 庭のくばの木の葉も…

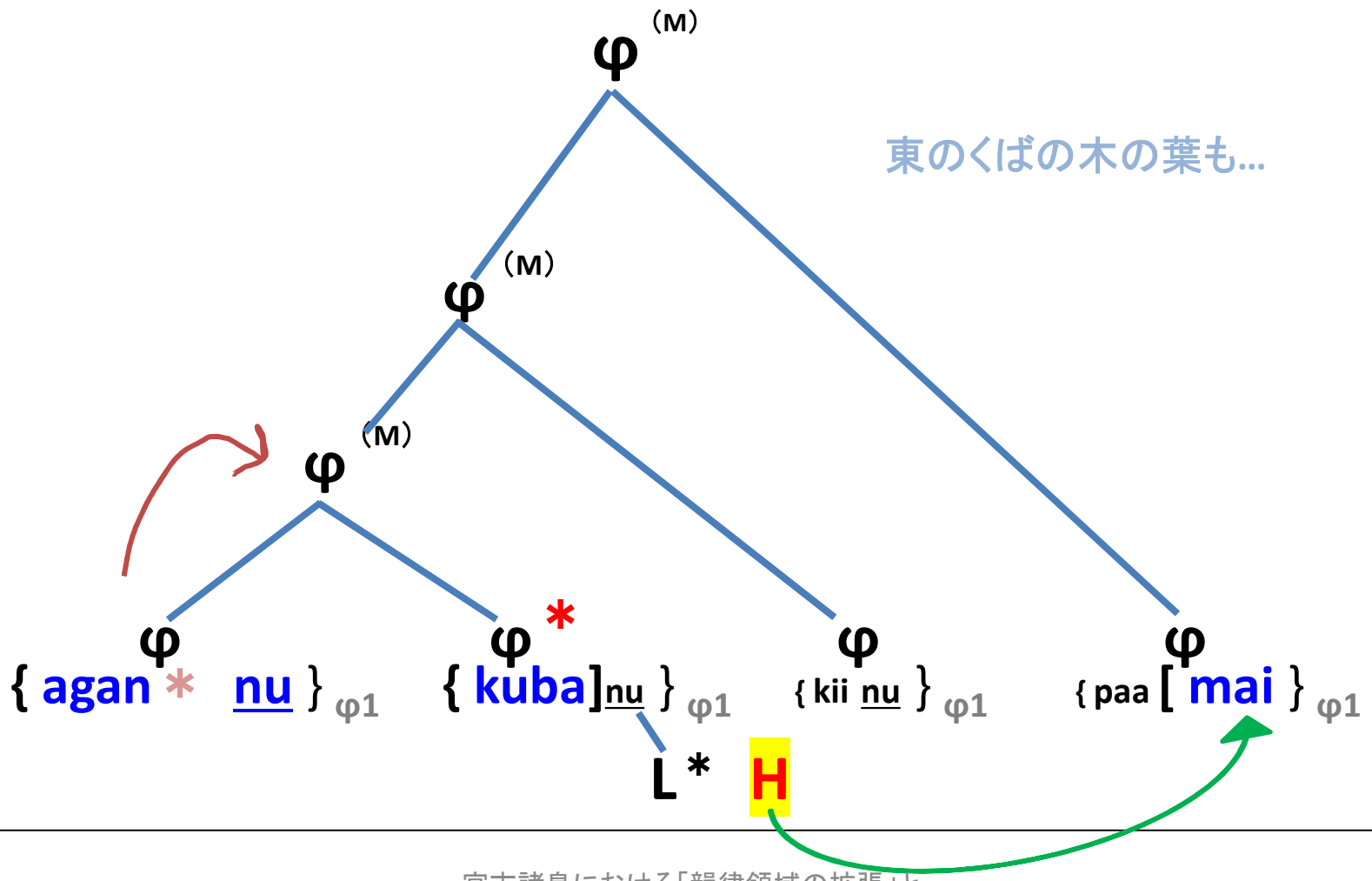
tarama] nu kuba nu kii nu [**pa**]a mai… 多良間のくばの木の葉も…

仮説：A型の 低核 は、左から最大3つ目のφに実現。　（3つめに実現する場合）



仮説：A型の 低核　は、左から最大3つ目の φ に実現する。

（2つ目に実現する場合）



まとめ：多良間島の「韻律領域の拡張」

①属格助詞「ノ」を持つ構造（修飾構造体） A型から始まる句に下降が出現

（本発表の立場： A型の低核が句のレベルで出現していると捉える。「韻律領域の拡張」が関与）

kuba gii nu ju] da * mai …　　くば木の枝も…

kuba gii nu paa] nu * panta N **[kee** …

くば木の葉の先端へ…

kuba gii nu paa nu pan] ta * mai …

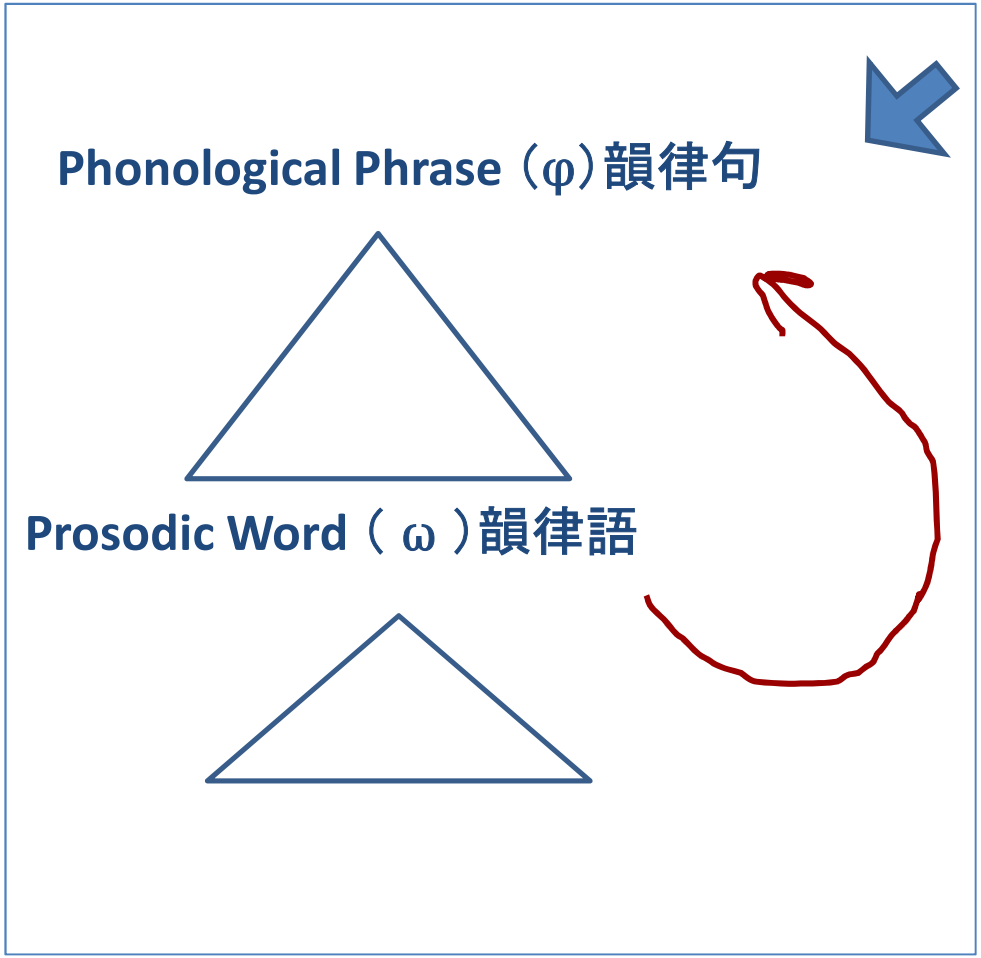
くば木の葉の先端も…

5. まとめと検証

多良間島のプロソディー（修正版）

- 三型体系（A型, B型 ,C型）
- ~~A型は核（＊）のない型~~
- A型は（最大）3つ目、B型は2つ目、C型は1つ目の韻律カテゴリー（韻律語 or 韻律句）に＊ のある型
- A型の＊は原則的に韻律句 $\varphi^{(M)}$ のレベルで出現する。
- ＊の位置の計算に用いられる単位は、（モーラに加えて） 韻律語と韻律句
- （弁別的なのは）低いところ（低核）
- 基本音調を L*H と想定する。
- そのL*H の最後のH音調は原則的に韻律句 $\varphi^{(M)}$ のレベルではじめて出現する。

検証：宮古諸島の「韻律領域の拡張」と多良間島に関する通時的仮説



現代の多良間島の
① A型の低核、
② L*Hの最後のH音調
は（原則的に）このφのレベルでは じめて出現する。

「韻律領域の拡張」
が生じた結果

（松森：通時的仮説）
かつては多良間島においても、
ωの最大投射の文節レベルでも、
① と ② が 出現していたのではないか。

多良間島のC型とA型名詞から始まる名詞(句)を検討する　渡久山・セリック（2020）に基づく

C 型の名詞「海 im　針 par　砂糖 sjata　松 matsɨ　骨 puni 」と
A型の名詞「牛 usɨ　魚 ɨzu　風 kadi　酒 sjaki　鼻 pana 」を使って

◆修飾構造体では…

① C型の語から始まるものは、その最後の韻律語にH音調が実現

ma] tsɨ gii nu nar（松の実・まつぼっくり）

☛ ma] tsɨ gii nu nar [mai

pa]r nu uja（かやぶき屋根を葺くときに針を持つ係・針の親）

☛ pa]r nu uja [mai

② A型の語から始まるものには、その低核が出現

kadi nu mi] tsɨ（風の通り道）　sjaki nu usja] i（酒の肴）

ɨzu nu pu] ni（魚の骨）　usɨ nu tsɨ] nu（牛の角）

usɨ nu fu] sja（牛の草・飼料）　usɨ nu fu] sju（牛ふん）

多良間島の複合語規則の例外について
（C型の語を前部要素に持つ複合語）

セリック・青井（2022）：
「複合アクセント法則（式保存）」 の例外を指摘

maar（鞠：C型） + kir（蹴る：C型） = mai

⇒ (maa] r)ω (kir) ω ([mai)ω

鞠蹴りも…

予測される型： × (maa] r)ω (kir) ω (mai)ω

⇒ セリック・青井（2022）説：「後部要素の型が実現している」と説明。

⇒ 松森（本発表）の仮説：過去の音調型の痕跡？
基本音調（L* H） のH音調が韻律語のレベルでも出現している？

多良間島のC 型名詞から始まる複合語検討

渡久山・セリック（2020） に基づく

C 型の名詞 「海 im　針 par　砂糖 sjata　松 matsɨ　骨 puni 」

◆複合語（後部が動詞から派生したもの）

sja] ta nii（砂糖煮・砂糖づくり）　i] m. uri（海へ下りる行事・漁に行くこと）

pu] ni tsɨgɨ（骨接ぎ） pu] ni jam（骨痛・労働に疲れること）

☛ pa]r tsɨkɨ（針突き・刺青） pa]r tsɨkɨ [mai

◆複合語（それ以外）

i] m sjugar（海への支度） i] m dur（海鳥・千鳥・かもめ） i] m pɨtu（漁師）

i] m wazja（海仕事） pa]r baku（針箱） sja] ta daru（砂糖樽）

sja] ta dzaki（砂糖入り の酒） sja] ta baku（砂糖を入れる箱）

ma] tsɨ gii（松の木） ma] tsɨ gii jama（松林）

☛ pu] ni ɨzu （骨の多い魚） pu] ni ɨzu [mai

多良間島：C型名詞から始まる複合語の文節末のH音調

課題：　韻律句のレベルでできた構造ではないのに、
上昇が出現する複合語　（松森の仮説：過去の音調型の痕跡？）

☛ par（針：C型）　tsɨkɨ　（突く：C型）　(pa]r tsɨkɨ [mai)$_{\omega}$

pa] r*　＋　tsɨkɨ　[mai　　刺青も…

L* H

☛ puni（骨：C型）　ɨzu（魚：A型）　(pu] ni ɨzu [mai)$_{\omega}$

pu] ni*　＋　ɨzu　[mai　　骨の多い魚も…

L* H

多良間島：C型名詞から始まる単純語の文節末のH音調について

課題：句のレベルでできた構造でもないし、複合語でもないのに、
上昇が出現する語（単純語）がある　　セリック（2021）

☛ **ra]** kkjoo（辣韭：C）　　らっきょうも…

ra] Q* kjoo　　[**mai**

L*H

u] ikjoo（ういきょう：C）　　**u]** ikjoo [**mai**　　ういきょうも…

sja] nsjufu（シャコ貝：C）　　**sja]** nsjufu [**mai**　　シャコ貝も…

多良間島の複合語規則の例外
（A型の語を前部要素に持つ複合語について）

セリック・青井（2022）　：

「複合アクセント法則（式保存）」 の例外を発見

（「後部要素の型が実現している」と説明。）

kusɨ（A型）**+ jam**（C型）　⇒

(**kusɨ**)ω　(**ja]m**)ω　(**mai**)ω

腰痛も…

予測される型：　× (**kusɨ**)ω　(**jam**)ω (**mai**)ω

多良間島のＡ型名詞から始まる複合語を検討
渡久山・セリック（2020） に基づく

A型の名詞 「牛 usɨ 魚 ɨzu 風 kadi 酒 sjaki 鼻 pana 」

◆複合語（後部が動詞から派生したもの）

ɨzu ja]kɨ （魚を焼くこと） pana nara] sɨ （鼻を鳴らす・いびき）

ɨzu tu]r（魚とり） sjaki nu] m（酒を飲むこと・酒宴） pana dzɨma]r（鼻づまり）

☛ **ɨzu ja]kɨ （魚を焼くこと）⇒ ɨzu ja]kɨ mai**

◆他の複合語

ɨzu namasɨ （魚の刺身） kadi gataka（風除け・防風林）

kadi sɨtaara（風下） kadi duri（凪、風がない状態） sjaki daru（酒樽）

sjaki dai（酒代金） pana sɨɨ（鼻汁） pana gui（鼻声）

☛ **pana tsɨɨ mai ～ pana tsɨ] ɨ mai （鼻血も）**

pana gii mai ～ pana gi] i mai （鼻毛も）

pana midzɨ mai ～ pana mi] dzɨ mai （鼻水も）

pana pɨgi mai ～ pana pɨ] gi mai （鼻毛・鼻ひげも）

多良間島：A型の語から始まる複合語の音調型

本発表の立場：句のレベルでできた構造ではないのに、A型の語から始まる複合語に低核が出現する場合がある

松森の仮説：これはA型が本来持っている低核が（例外的に）語レベルにおいて出現したものでは？

☛ ɨzu (A型) ＋ jakɨ (A型) （魚を焼くこと）

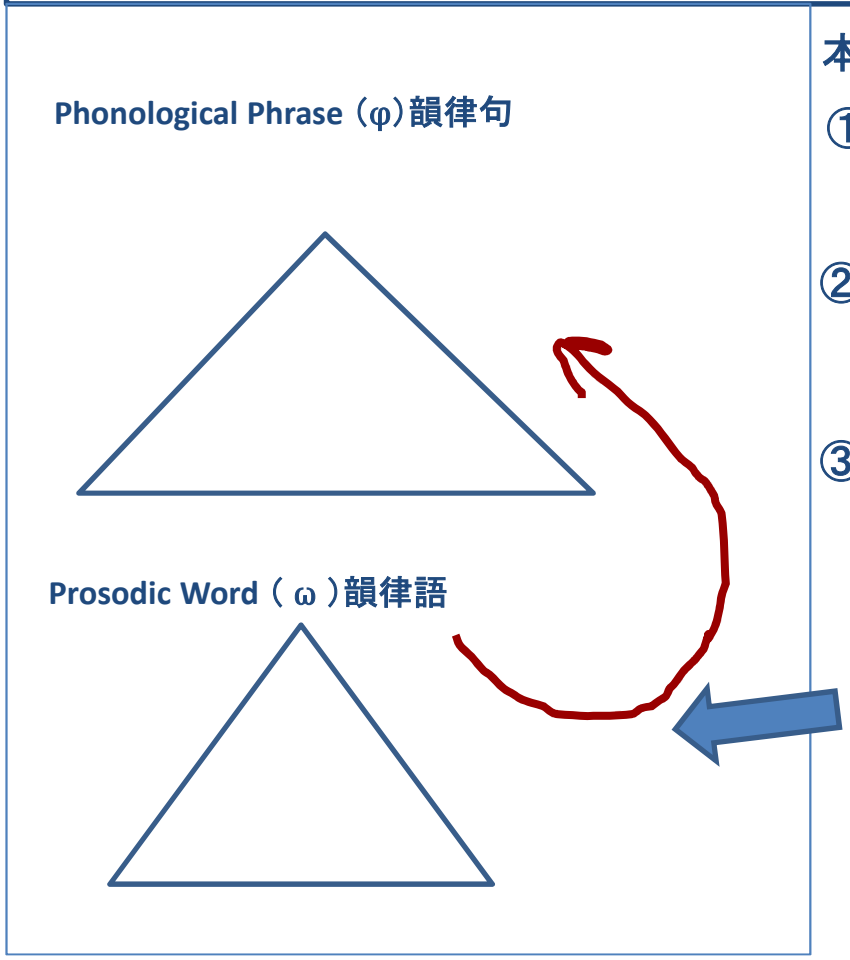
ɨzu ja] kɨ mai

L* H

☛ pana (A型) ＋ tsɨɨ (A型) （鼻血）

pana tsɨɨ mai ～ pana tsɨ] ɨ mai

まとめ：宮古諸島の「韻律領域の拡張」と多良間島のプロソディー



本発表で提示した仮説

① 現代の多良間島では、基本音調である L*H の H音調とA型の低核は（原則的に） $\varphi^{(M)}$ のレベルで実現する。

② しかし過去には、ω の最大投射のレベル（＝文節） においても これらが 実現していたのではないだろうか？

③ 依然として現代でも ω のレベルでそれが 実現する語も、残されているのでは？

pa]r tsɨkɨ （針突き・刺青）

pa]r tsɨkɨ [mai

pana tsɨ] ɨ （鼻血）

pana tsɨ] ɨ mai

（松森解釈：これらは過去の音調型の痕跡？）

本発表の提案と
宮古諸島の三型体系記述の将来

本発表の提案

（1） 宮古諸島を通じて L*H が基本音調として想定できるかもしれない。
（2） ただし多良間島では、L*H の H音調は（原則的に）文節より上のレベル（韻律句のレベル）で観察される。
（3） 多良間島でも（上地・与那覇と同様）、A型は低核を持つ。ただし、多良間島のA型の低核は（原則的に）文節より上の韻律句のレベルで観察される。
（4） 通時的仮説： 例外的に文節内部にも（2）、（3） が見られることがある。それは、過去の音調実現の痕跡ではないか。

今後の調査の課題

（1） 宮古諸島には「韻律領域の拡張」（窪薗 2021: 256） が広範囲にわたって生じた（ている）可能性がある。したがって、
（2） 今後、宮古諸島の3つの音調型の記述にあたっては、韻律語（ω）の最大投射（＝文節）のレベルにとどまらず、それより上のレベル（韻律句（ φ ）レベル）の音調まで観察する必要がある。
（またこれによって、あらたな発見が成される可能性も期待できる。）

今後の見通し：宮古諸島では述語部分への「韻律領域の拡張」が広範囲に観察されるのではないだろうか？

五十嵐ほか（2012）、五十嵐（2018）

池間方言： 文節内部では区別できない特徴が、述語を後続させると出現する。

A {{ **butu** mai }$_{\varphi}$ { njaan }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ 夫もいない。

B {{ **hana** mai }$_{\varphi}$ { **njaan** }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ 花もない。

C {{ **nabi mai** }$_{\varphi}$ { njaan }$_{\varphi}$ }$_{\varphi}$ 鍋もない。

ここにも「韻律領域の拡張」が関わっている可能性がある。

九州2型体系における「韻律領域の拡張」（対格名詞＋動詞）

【1】鹿児島市方言（窪薗　2021：278）

{ヒコーキオ}	{ミケ}	{イッタ}	⇒	{ヒコーキ ミケ}	{イッタ}
（飛行機：A）	（見に：B）	（行った：A）		飛行機（を）見に（A）	行った
{チョーサオ}	{シケ}	{キタ}	⇒	{チョーサ シケ}	{キタ}
（調査：B）	（しに：A）	（来た：B）		調査（を）しに（B）	来た

【2】熊本県八代市上深水方言の例（山田 2018）

{サケ}	{ツグ}	⇒	{サケツグ}	（酒を注ぐ：A）
（酒：A）	（注ぐ：A）			
{サケ}	{ノム}	⇒	{サケノム}	（酒を飲む：A）
（酒：A）	（飲む：B）			
{スー}	{ツカウ}	⇒	{スーツカウ}	（酢を使う：B）
（酢：B）	（使う：A）			
{スー}	{ノム}	⇒	{スーノム }	（酢を飲む：B）
（酢：B）	（飲む：B）			

九州2型体系における「韻律領域の拡張」（主格名詞＋自動詞）

【3】 熊本県八代市上深水方言の例（山田2018）

a. { ヒン } { デタ } ⇒ { ヒン デタ } （日が出た：A）
（日が：A） （出た：B）

{ ネズミン } { オル } ⇒ { ネズミン オル } （鼠がいる：B）
（鼠が：B） （いる：A）

b. { ヒノ } { テル } ⇒ { ヒノ テル } （日が照る：A）
（日が：A） （照る：B）

{ ネズミノ } { オル } ⇒ { ネズミノ オル } （鼠がいる：B）
（鼠が：B） （いる：A）

宮古諸島プロソディー研究の今後の課題

宮古諸島の諸体系には、特に次のような条件下で「韻律領域の拡張」が広範囲に観察されるのではないか。詳細な調査・検討の必要がある。

【1】前部が後部を修飾するような関係にある句構造 （修飾構造体）において

- X nu Y (nu Z) … **kadi nu u**tu mai … 風の音も…

  jaroo nu paa nu sjak~~i~~ **kara**… てりはぼくの葉の先から…

  jaama nu kuba nu kii nu paa **mai** …
  八重山のくばの木の葉も…

- 形容詞＋名詞 **(bida)**ω**(kuba)**ω～**(bida)**ω**(ku**ba)ω 低いクバ（の木）

【2】動詞とその項関係にある要素間において

- 対格＋他動詞 酒を飲む。魚を獲る。魚を焼く。鞠を蹴る。…
- 主格＋自動詞 鍋が（も）ない。腰が（も）痛む。… ）

対格・主格以外の助詞（与格、奪格、向格など…）の場合も調査して比較・検討する必要がある。

予測： 上記のような視点からあらたに調査を行えば、さらなる発見につながる可能性がある。

参照文献1

青井隼人（2016）「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント：その特徴と型の中和」『音声研究』20(3)：76-81.

青井隼人（2017）「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』 13： 1-23，国立国語研究所.

青井隼人（2018a）「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』 14：1-27.

青井隼人（2018b）「南琉球宮古多良間方言のアクセント規則」　日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会（6月22日）.

五十嵐陽介（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』1-42. 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座

五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150：33-57.

五十嵐陽介（2018）「これからの方言アクセント研究がなすべきこと」日本語学会 2018年度春季大会シンポジウム「日本語記述研究の未来―今なすべきこと―」

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(１)：134-148.

参照文献2

Ito, Junko and Armin Mester (2013)　Prosodic Subcategories in Japanese. *Lingua* 124: 20-40.

窪薗晴夫（2021）『一般言語学から見た日本語のプロソディー―鹿児島方言を中心に―』くろしお出版

窪薗晴夫・守本真帆（編）（2022）『プロソディー研究の新展開』 開拓社

セリック，　ケナン（2021）「多良間方言の韻律構造：韻律語の再定義の試み」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究会　（3月14日）

セリック，　ケナン・青井隼人（2021）「宮古語多良間方言におけるアクセント単位の定義に関する試論」 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会（12月18日）

セリック，　ケナン・青井隼人（2022）「南琉球宮古語多良間方言における『名詞＋動詞』構造の複合名詞アクセント」窪薗晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』開拓社　236 - 257.

Selkirk, Elizabeth (2009)　On Clause and Intonational Phrase in Japanese: The Syntactic Grounding of Prosodic Constituent Structure. 『言語研究』 36：35-73.

新田哲夫（2018a）「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」 国立国語研究所共同研究プロジェクト 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第 2 回合同研究発表会　（2月18日）

参照文献3

新田哲夫（2018b）「南琉球多良間方言のアクセント低核」 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会（9月17日）

新田哲夫（2019）「南琉球多良間方言のアクセントの弁別特徴と名詞句のアクセント」159回日本言語学会ポスター発表 （11月17日）

新田哲夫（2022）「南琉球池間方言アクセントの動的音韻解釈 」音韻論フェスタ2022 （3月7日）

平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』 學界之指針社.

平山輝男（編著）(1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社.

平山輝男、大島一郎、中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』 桜楓社.

Matsumori, Akiko （2001）Historical Tonology of Japanese Dialects. Kaji, Shigeki (ed.) Proceedings of the Symposium: Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Japanese Accentology, and Other Topics. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 93-122.

松森晶子（2010）「多良間島の 3 型アクセントと 『系列別語彙』」上野善道監修 『日本語研究の12章』 490-503. 明治書院.

松森晶子（2013）「宮古島における 3 型アクセント体系の発見―与那覇方言の場合―」『国立国語研究所論集』 6： 67-92. 国立国語研究所

松森晶子（2014）「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要文学部』 63 ： 13-36.

参照文献4

松森晶子（2015）「南琉球の三型アクセント体系―その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要　文学部』　64：55-92.

松森晶子（2016）「多良間島における文のプロソディー―韻律句が連なる場合の音調交替現象について」　国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」　キックオフワークショップ（1月11日）

松森晶子（2017）「3モーラのフットを持つ方言―南琉球宮古島の上地と与那覇の三型体系―」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会（6月18日）

Matsumori, Akiko （2019）　A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan. The Linguistic Review. 29 (1)：51-83. De Gruyter　Mouton

山田高明(2018)　「熊本県八代市坂本町上深水方言に観察されるアクセント単位の拡張現象」『音声研究』　22(3)：17-28.

＜第1次資料＞

セリック・ケナン・大浦辰夫（2022）『みんなふつ語彙集』　国立国語研究所言語変異領域

渡久山春英・セリック・ケナン（2020）『南琉球宮古語多良間方言辞典』　国立国語研究所学術情報リポジトリ